

各県有志蚕業集談会筆記

1882年11月

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

群馬長野
神奈川山梨
東京埼玉
栃木群馬
有志聯合

蠶業集會筆記

注



各縣
育志
蠶業集談會筆記

6699

- 第八條 蠶業問題目錄
- 第一條 原種桑質飼養何カ最モ緊要ナル歟
- 第二條 桑ノ善惡ハ新古ニアルカ
- 第三條 桑植付方之事
- 第四條 桑畑肥料之事
- 第五條 蠶種貯方之事
- 第六條 掃立之事
- 第七條 寒暖之事
- 第八條 養桑度數及量目之事
- 第九條 蠶シヤリ之原因及治方之事
- 第十條 起縮ミ之原因及治方之事
- 第十一條 節蠶ノ原因及治方之事
- 第十二條 明ル蠶ノ原因及治方之事
- 第十三條 食ニ後レ蠶ノ原因之事



- 第十四條 成繭目取之事
- 第十五條 解舒難易之事
- 第十六條 生皮苧多少之事
- 第十七條 絲口細太之事
- 第十八條 繭貯方之事

追加問題

- 第一條 細蠶ノ原因ハ如何
- 第二條 流蠶ノ原因ハ如何
- 第三條 蠶室ノ適否
- 第四條 繭ムクシタケノ原因如何
- 第五條 病桑樹ノ原因及治方如何
- 第六條 炎暑凌キ方ノ事
- 第七條 絲ノ質類ハ何ニ因リテ生スル歟
- 第八條 温暖育ト清凉育ト難易及利害得失如何

- 第九條 引蠶ノ老若利害如何
- 第十條 露桑ヲ與フルハ如何

○雜記數件

各縣 蠶業集談會 目次畢

群馬縣北甘樂郡富岡町富岡製糸所

會長 速水堅曹

同 南勢多郡水沼村

副會長 星野耕作

同 上野國山田郡桐生新町

世話掛長 佐羽吉太郎

同 同 山田村

同 星野傳七郎

發起人

群馬縣上野國新田郡堀口村

松本真三郎

同 同 佐位郡伊與久村

宮崎有親

同 同 伊勢崎町

德江八郎

同 同 南勢多郡關根村

桑嶋新平

同 同 同郡前橋町

山室喜四郎

同 同 西群馬郡青梨子村

松下善作

同 同 同

井草太郎右衛門

同 同 碓氷郡東上磯部村

萩原虎吉

同 同 安中驛

山田光就

同 北甘樂郡富岡町

佐藤國太郎

増玉縣武藏國兒玉郡兒玉町

島田清作

同 同 新宿村

木村九藏

○會員姓名

神奈川縣西多摩郡羽村	島田 宇吉	増玉縣 秩父郡 野上下郷	林市三郎
同 同	下田 伊左衛門	同 同	野原吾八郎
同 同	坂本次郎左衛門	賀美郡 勅使河原村	塚越 太平
増玉縣 大里郡 大麻生村	飯田 惣左衛門	同 八町河原村	八木芳太郎
同 同	須永 政義	同 同	桑原 芳平
同 同	古澤 花三郎	同 同	岩田 忠平
同 同	川原 明戸村	同 同	中塚 丑太郎
同 同	來間 定典	同 同	同 去ま
同 同	飯田 利平	同 同	同 去ま

増玉縣 榛澤郡 横瀬村	須長 淺治郎	枋木縣 足利郡 足利一丁目	初谷 長太郎
同 同	鳥羽 又三	同 同	丸山 治平
同 同	鳥羽 保三郎	安蘇郡 高山村	糸井 藤治郎
同 同	萩野 啓次	同 同	篠崎 清作
同 同	吉岡 幸作	同 馬門村	田沼 音松
同 同	北阿賀野村	同 新吉水村	金子 幸藏
同 同	橋本 八郎治	同 同	古平 源吾
同 同	同 良平	長野縣 小縣郡 岡村	松井 庄作
同 同	富田 三郎	同 同	若林 米藏
同 同	黒瀬 不壽二郎	同 本郷	望月 又八郎
同 同	相馬 金吾	同 上田町	工藤 柳助
同 同	同 治助	同 上九子村	宮下 六三郎
同 同	浪江 棟三	上伊那郡 伊那郡村	松下 茂作
枋木縣 都賀郡 大前村	山士 家左衛門	同 上飯田村	芦部 茂兵衛
同 同	足利郡 小俣村	同 同	同 同

長野縣	上伊那郡	片桐村	松村	理平	群馬縣	吾妻郡	須川町	木曾仙太郎
同	同	同	松澤	太郎九	同	同	同	見城傳平
同	同	同	市瀬	善次	同	同	同	市場光平
同	同	同	原	齋次	同	同	同	新井倉八
同	同	同	佐藤	傳平	同	同	同	菅谷勘三郎
同	同	同	河合	覺次郎	同	同	同	木暮茂八郎
同	同	同	黒巖	有哉	同	同	同	唐澤太平次
同	同	同	阿部	藤太郎	同	同	同	佐藤泰吉
同	同	同	神保	清十	同	同	同	大塚丈七
同	同	同	本多	淺五郎	同	同	同	佐々木一二
同	同	同	梅澤	量平	同	同	同	羽鳥全六
同	同	同	田代	龜太郎	同	同	同	岡田治平
同	同	同	高橋	梅太郎	同	同	同	町田彌三郎
同	同	同	梅澤	要一郎	同	同	同	原源太郎

群馬縣 那波郡 南玉村

群馬縣	那波郡	南玉村	神尾	岩藏	群馬縣	那波郡	長沼村	小茂田	源太郎
同	同	同	町田	孝五郎	同	同	同	同	丈衛
同	同	同	原三	郎平	同	同	同	五十嵐	半六
同	同	同	笠原	伸三	同	同	同	同	菊平
同	同	同	高橋	清平	同	同	同	日野原	弦太郎
同	同	同	高柳	太治郎	同	同	同	吉田	脩
同	同	同	野村	藤太	同	同	同	石原	勇八
同	同	同	多賀	谷角藏	同	同	同	佐藤	長八
同	同	同	田口	理兵	同	同	同	日野原	彦治郎
同	同	同	高柳	三郎平	同	同	同	小暮	英三郎
同	同	同	高橋	臺吉	同	同	同	矢内	虎司
同	同	同	木村	源五郎	同	同	同	坂野	源八
同	同	同	五十嵐	小平次	同	同	同	高木	孝三郎
同	同	同	清	衛	同	同	同	齊藤	茂重郎

同

同

同

同

同

同

同

同

同

水沼村星野
製糸場内

同

同

同

金子春吉

同

金子逸平

石原爲治郎

同

金子伊平治

前原馬次郎

同

茂木多五郎

那須三象

同

金子元平

奥山銀次郎

同

金井藤藏

横地定三郎

同

赤石北心

岡山歎太郎

同

櫻井庄平

小株秀順

同

齊藤孫佐久

神山雄一

同

金井只五郎

村田要作

同

倉上保造

伊藤守

同

栗原龜吉

新井鼎作

同

岡田三郎

金子庄三郎

同

真下珂十郎

星野七重郎

同

森吉太郎

群馬縣 碓氷郡 原市村

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

梅垣米藏

同

石島文十郎

吉村駒吉

同

小野佐四郎

新井捨十郎

同

新井金平

横尾佐十郎

同

木村房吉

小池安次郎

同

津久井英太郎

高橋茂太郎

同

野小作

折茂光太郎

同

深澤市治

三木與四郎

同

秦周

高山武重郎

同

小林周次郎

町田菊治郎

同

青木武平

同

同

同

同

同

同

同

倉林喜四郎

同

佐々木兵之輔

小泉信太郎

同

福島信太郎

武藤幸逸

同

松下政右衛門

淺野文七

同

井草泰三郎

群馬縣	西群馬郡北原村	赤島常七	群馬縣	利根郡	高橋重兵衛
同	利根郡 月夜野村	小野善兵衛	同	同	小淵半助
同	同	原澤傳太郎	同	同	吉澤瀧太郎
同	下津村	佐傳次	同	同	小淵重右衛門
同	同	佐四郎	同	小仁田村	鈴木金太
同	同	錄太郎	同	北甘樂郡七日市村	大島佳宏
同	同	喜惣治	同	同	池内信嘉
同	同	深津友次郎	同	馬山村	山田平八郎
同	同	高橋直衛	同	富岡町	一鬼久太郎
同	同	本木常吉	東京府	京橋區	江頭六郎
同	同	飯塚爲三郎	京都府	何鹿郡	渡邊元太郎
同	同	小林安太郎	岐阜縣	厚見郡	竹内郷一
同	同	大島甚作	同	同	
同	同	赤井七郎兵衛	同	同	
同	同		同	同	

明治十五年十一月十七日群馬縣下洞生新町洞生會社樓上ニ於テ開會

會長速水堅曹 今回七縣聯合共進會褒賞授與式ノ終ルヲ期シ七縣下ノ有志諸君カ相會シテ此蠶業集談會ヲ開クノ美譽アルヲ聞キ拙者モ頗ル之ヲ賛成セリ然ルニ發起諸君ヨリ左ノ如キ困難ナルヲ依託セラレタリ曰ク本會ハ七縣下ノ有志者集會ナレハ會員モ余程多人數ニソ加フルニ短日ノ時ナシハ真正ノ會議体裁ニ倣フキハ必スヤ若干ノ時間ヲ費サバルヲ得ス斯クテハ實業者諸君ニ於テモ多少ノ差支ヲ生スヘキニ付本會ハ成ルヘク簡畧ヲ主トスル見込ナリ故ニ會長撰擧シ如キモ會員着席ノ上投票ヲ以テ公撰スルハ固ヨリ當然ノ事ナリ然レモ前陳ノ如キ旨趣ナルヲ以テ本會々長ノ任ヲ拙者ニ依囑スルトノ言ナリ然レモ不肖ナル拙者決シテ其任ニ堪フル能ハサルヲ以テ再三之ヲ辭スルト雖モ諸君之ヲ肯モス固ク之ヲ止マズ然ルニ斯ク諸君ヨリ囑托セラレハ、ナ一概ニ謝絶スルモ亦本意ニ非サルヲ以テ己ムヲ得ス其任ヲ受諾シ及ハスナカラ會長ノ席ヲ汚ノ場合ニ立至リタリ然レ拙者ハ固ヨリ會議法ニモ熟練セサルヲ以テ必スヤ不行届クニ多カルヘシ諸君幸ヒニ之ヲ恕セヨサテ本會ノ精神タル決シテ議論ヲ主トスルモノニアラス

各自ノ利益トナルヘキコトヲ互ニ相交換スルモノナルハ討論駁議スルコトナク單ニ各自經驗上ノ實説ヲ陳述スルマテニ止メタシトシテ主意ニ決シ乃チ此ニ掲出スル如ク會員心意書ヲ製シタリ然リ而シテ我邦ニ會議法ノ行ハルハ日尚淺シ故ニ其弊モ亦隨テ多シ然レ本會々員何レモ皆實業ニ從事スルノ諸君ナレハ力メテ實益ヲ主トシ互ニ口頭ノ論辨ヲ難問シ徒ラニ議論ニ流ルハカ如キコトナカランコトヲ希望ス故ニ其演説ノ拙ナルヲ厭ハス各自經驗上ノ實説ハ十分腹藏ナク吐露セラレタシ斯クノ如キ主旨ナルヲ以テ本會ノ問題モ別ニ決テ取ルヲ要セス只諸説ノ盡キタルト見認メテ以テ本題ヲ議了シタルモノトナシテ次項ニ移ルヘシ而シテ諸君ノ陳述ハ書記之ヲ筆記シテ他日印刷ノ上之ヲ各位ニ配賦スヘシ諸君乞フ深切着實ヲ主トシテ演説セラレシコトヲ

古平源吾 本會ノ成立ヲ祝セシタメ聊蕪辭ヲ朗讀シタシ因テ會長ノ許可ヲ乞フ會長速水堅曹 之ヲ諾ス於是古平源吾開場ノ中央ニ進ミ祝辭ヲ朗讀ス

河海ノ洋々タルハ細流ヲ容ルニヨリ富岳ノ巍々タルハ土壤ヲ集ムルニ成ル萬物皆然リ彼歐米諸國ノ如キ頗ル文物ヲ以テ宇宙ニ鳴ルモ敢テ初メヨリ開明ナル

モノニ非ラス廣ク衆思ヲ集メ衆ク疑團ヲ質シ其經驗ト實驗トヲ積ミ以テ今日ノ隆盛ヲ致セリ蓋シ衆思ヲ集ムレハ則チ智慮益遠ク疑團ヲ質セハ則チ發明亦多シ宜哉發起者諸君茲ニ見アリ七縣聯合共進會ニ亞クニ蠶業集談會ヲ以テス噫美ナリト謂ツヘシ抑モ養蠶ノ事項タル其關係甚廣シ蓋シ地ニ高低アリ燥濕アリ肥瘠アリツテ而シテ山迎ロ谷送ル如キアリ陵岡横ツテ川澤纏リ或ハ寒或ハ暄時氣自ラ一チラス其家室ニ至ツテモ陽ニ面スルアリ陰ニ向フアリ茅屋アリ高樓アリ而シテ其桑樹ノ種別ヨリ以テ肥料ノ良否及蠶質ノ強弱大小飼養ノ功拙等ニ至ルマテ千態萬狀何レカ是ニシテ何レカ非苟モ其當ヲ失ロハ百害之ニ隨フ然而シテ從來徒ラニ疑ヲ欠ヒテ而止ム其淺慮寡謀モ亦甚シ豈ニ誤ヲサランヤ今ヤ其數項ニ就キ其由ル所ヲ談論シ以テ完全無欠ノ良規ヲ將來ニ垂レントス嗚呼謚ナル哉我報國社ニ於ケル亦此ニ感アリ既ニ該會ヲ設クルト雖モ唯ニ社内ニ止ル而已今ヤ本會ヲ設アリ必スマ高議卓論上ハ以テ百歲ノ惑ヲ解キ下ハ以テ鴻益ヲ將來ニ廣ムヘキナリ生等幸ニ此盛會ニ與ルヲ得感喜何ツ止マン謹テ祝ス

長野縣下小縣郡上田町

明治十五年十一月十七日

報國會社

會長速水堅曹 幹事ヲ撰擧スヘキ答ナレハ何分時間モナキ故發起人ヲ以テ其儘
幹事ノ場ニ充ツヘシ諸君之ヲ諒セヨ

松井庄作 只今會長ノ演說ニヨリ本會ノ成立ハ畧了解シタレハ僅カニ廣告文ヲ讀
ミタルノミナレハ未ダ十分ニ其主旨ヲ知ル能ハス仍テ本會ノ大体ニ就テ聊カ卑
見ヲ述ヘタシト存スレハ一休此會ハ本日限り閉場スルカ又ハ連日開會ノ積ナル
カ

會長速水堅曹 來集諸君ハ何モ皆實業ニ從事セラル、モノナレハ一片時間モ惜マ
ル、ナルヘシ故ニ連日開會ヲ望マス成ルヘク速カニ局ヲ結ビタシ併シチカラ折
角各地ヨリ來集シテ輕々ニ論了シ去ルモ遺憾ナレハ彼是斟酌シテ今明兩日中ニ
完結シタシ

松井庄作 了解セリ就テハ大体ニ關シテ意見書ヲ認メナキダレハ問題ニ取掛ル前
ニ諸君參考ノタメ書記ヲ煩ハシテ朗讀セラレンコトヲ乞フ
會長速水堅曹 然ラハ自ラ之ヲ朗讀セラレヨ

松井庄作 建議書ヲ朗讀ス

國家ノ富饒ヲ計ラント欲スルニハ國ニ產ヲ盛ニセサル可ラス故ヲ以テ國產ヲシ
テ盛大ナラシムルハ吾人々民ノ一大急務ト云フヘシ然而シテ我國產中第一ノ地
位ヲ占有スルモノ生絲ニ若クハナシ然ラハ則一國ノ富強ヲ計畫スルモノ此點ニ
着目セサルヘカラス我七縣ノ當路者茲ニ見アリ依テ七縣聯合共進會ナルモノヲ
開設シ該產ノ改良ヲ謀レリ而シテ其目的ヲ達セント欲スルニハ蠶種ノ精撰養蠶
ノ方法桑樹ノ培養等ヲ講究スルニ在リ是發起諸君蠶業集談會ヲ設ケ我七縣ノ養
蠶ヲ盛大ナラシメ併セテ國產ノ改良進歩ヲ謀ル所以ナリ嗚呼偉ナル哉此舉マ盡
セル哉此會マ然ル本會ヲシテ完全ノ功ヲ奏スルヲ得セシムルニハ永久之カ維持
繼續ヲナサ、ルヘカラス故ニ一社ヲ設立シ定期ノ會合ヲナシ且各社員ノ見聞ト
疑點ト意見アルモノヲ本社ニ寄セ本社ハ之ヲ一ノ雜誌ニ編輯シ各社員ニ頒布シ
以テ相研究セハ其益蓋シ少ナキニアラサルヘシ吾輩之ヲ望ム久シ矣幸ニ此舉ニ
際會ス實ニ得難キノ好機ナリ諸君若シ吾輩ト感テ同セハ賛成アラシコトヲ其方法
規則ニ至テハ委員ヲ撰定シテ之ヲ決議スヘシ依テ不肖ヲ顧ミス建議スルコト爾リ

長野縣下小縣郡上田町

報國社女員

松井庄作

古平原吾

若林米藏

明治十五年十一月十七日

真下珂十郎 只今信陽報國社女員ヨリ祝辭ヲ朗讀セラレタリ本員モ口頭ヲ以テ聊

カ祝意ヲ陳述セントス許可サルハヤ否

會長速水堅曹 大主意ヲ單簡ニ述ラレヨ

真下珂十郎 諸君足下ニ白ス生ハ碓氷郡勸業委員ノ一人ナル真下珂十郎ト云フ者

ナリ今回幸ロニ本會女員タルノ榮ヲ得タリ實ニ欣喜ノ至リニ堪ヘス茲ニ祝意ヲ

表シ聊カ卑見ヲ述ヘントス今此會ニ列セラルハ諸君ノ中ニハ蠶種ヲ業トスル

モノアルヘク養蠶ヲ業トスルモノアルヘク又製糸家モアルヘク機械家モアルヘ

シ然而シテ今回七縣聯合共進會授與式ノ終リニ當テ獨リ蠶業ノ集談會ヲ開クモ

ソハ抑モ亦所以アルナリ凡物其本定ラサレハ末堅カラスト宜ナル哉爾アリテ生

糸アリ生糸アリテ織物ヨリ而シテ今ヤ我邦織物ノ一般ヲ觀察スルニ美ハ實ニ美
ナリト雖モ未タ以テ廣ク海外ニ輸出スルコト能ハサルハ何ソヤ其業ノ未タ海外諸
國ニ及ハサル所アルヲ以テナリ果シテ然ラハ今日我邦ノ急務ハ機械ノ業ヲ改良
ソ以テ益盛大ナラシムルニアリ之ヲ改良擴張センコト欲セハ須ク生糸ヲ改良ス
ヘシ生糸ヲ改良セシコト欲セハ必ス先ツ蠶業ヲ改良シ多量ノ良繭ヲ得ルノ道ヲ
講セサル可ラサルハ理ノ最モ觀易キモノナリ然而シテ繭ニシテ完美ナレハ糸ニ
好結果ヲ得ヘク糸ニシテ好結果ヲ得ハ織物モ又隨テ善美ナルヘキハ更ニ疑フヘ
カラサルモノナリ是レ乃チ今日ニシテ此集談會ヲ開設スルノ己ムヘカラサル所
以ニシテ其實益モ亦鮮少ナラサルヘシト信スル所ナリ今ヤ諸君カ熱心論談スル
此會ノ目的ヲシテ果シテ達スルコトヲ得セシメハ他日必ス好結果ヲ得テ以テ終ニ
其功ヲ機織ノ業ニマテ及ホサンコト期シテ待ツヘキナリ果シテ然ラハ獨リ生等ノ
幸福ノミナラス亦我邦ノ幸福ナリ豈愉快ナラスヤ聊カ蕪辭ヲ述ヘ以テ祝ス

第壹條 原種桑質飼養何レカ最緊要ナル歟

岡田三郎 此三點中最モ緊要ナルモノハ原種ナリトス故ニ原種ハ蠶業ノ母トモ云フヘキモノニシテ一粒タリト輕忽ニ附スヘカラサルモノナリ第二ハ桑質ナリ桑ハ糸トナルヘキノ元素ヲ含ムモノナレハナリ而シテ飼養ハ三點中第三ニナカサル可ラス

武藤幸逸 原種トハ蠶種ト桑種ト何レヲ指スカ

松下善作 蠶種ヲ指スナリ

高井梅吉 生モ原種ヲ以テ最モ肝要ナルモノト思考ス而シテ桑ヲ第二トシ飼養ヲ

第三トス

野村藤太 本問ニ就テ緊要ナルモノノ順序ヲ云ハ、生ハ飼養ヲ第一トシ原種ヲ第二トシ桑質ヲ第三トスルヲ以テ至當ナリトス何ントナレハ飼養法ニシテ一度之ヲ誤レハ如何ナル良種ニ如何ナル良桑ヲ與フルモ決シテ好結果ヲ得ル能ハス到底徒勞徒爲ニ屬スヘキノミ且原種ハ大切ナルモノニ相違ナケレト飼養其道ヲ得ハ其原種タケノ品ヲ得ラルヘキハ論ヲ待タス原種ハ天然ニシテ飼養ハ人造ナレ

ハナリ故ニ飼養ヲ措テ他ニ第壹トスヘキモノナシト信ス

小泉信太郎 飼養ヲ以テ第一トスルノ説ニ同意ナリ

松井庄作 小生モ野村君ノ見込ト大同小異ナリ然レ原種ト飼養ト二ツノモノハ譬ヘハ父ト母トノ如シ決シテ離ルヘカラサルモノト思考ス何トナレハ良繭ヲ得ント欲セハ原種ヲ撰ハサルヘカラス繭ノ收穫多カラント欲セハ飼養最緊要ナレハナリ故ニ原種ト飼養トハ父母ノ如ク桑ハ之ニ次クモノト云フヘシ

山田平八郎 第一ヲ飼養トシ第二ヲ原種トシ第三ヲ桑質トス何ントナレハ飼養ハ中々書ヲ讀ミタリトテ教師ヲ雇ヒタリトテ容易ニ其道ヲ得ラル、モノニアラス只數年ノ經驗ニヨリテ始メテ能クシ得ルノミ故ニ何程良種ヲ掃タリトテ飼方拙ナレハ必ス損害多カルヘシ同一ノ蠶種ニ同一ノ桑ヲ與ヘテモ五斗取レハモアリ一石五斗取レルモアリ亦分量五百目ヲ得ルアリ一貫五百目ヲ得ルアレハ必ス飼養ヲ以テ第一トセサル可ラサルナリ然レニ原種ニハ已ニ良種ト云フモノ定マリテアレハ強テ心配スルニ及ハス且其損益ニ至ツテモ飼養程ハ區域廣ロカラサレハナリ

宮下六三郎 小生ハ原種ト養方トハ車ノ両輪ノ如キモノニシテ桑ハ之ニ次クモノト考フ

桑島餘太郎 小生ノ意見モ野村君ト同一ナリ原種ノ如キハ飼養其道ヲ得レハ敢テ之ヲ他ニ求ムルヲ要セサルニ至ルヘシ

野原吾八郎 小生ハ己ニ十ヶ年間モ實業ニ付テ經驗スルニ都テ野村君ノ説ト異ナルコトナシ

小茂田丈衛 本間ハ天地人三才ノ如キモノナリ併シ強テ之ヲ分ツルハ原種ヲ以テ第一トセサルヲ得ス

倉林喜四郎 蠶種ハ養蠶ノ原ナレハ種類多シト雖モ原種ヲ以テ甲トシ寒暖風雨何レモ害アリ之ヲ凌クヤ養方ナリ故ニ飼養ヲ乙トシ桑質ヲ以テ丙位ニオカサルヘカラス

高橋梅太郎 本題ハ養蠶上最大要務ニシテ一モ欠クヘカラスモノナレモ其内桑ヲ第一トス故ニ良好ノ桑質ヲ撰シテ蠶兒ヲ養育スルルハ不順ノ氣候ニ罹ルコトアルモ幾分カ害ヲ免ルコトアルヘシ

古澤花三郎 飼養ヲ以テ第一トセサルヘカラス何ントナレハ此三者ハ養蠶ノ大主

眼ニソ一ツモ欠クヘカラスハ余輩ノ贅言ヲ待タスト雖モ其大概ヲ言ハシニ原種ハ是レ本原ナリ而シテ原種ニ種類ノ良否アリ品位ノ優劣アリ其種類ノ惡シキモノハ最良ノ桑ヲ與ヘテ熟練者カ能ク養フト雖モ其取獲ノ量ハ相應ニ得ラル、モ粒位並揃ニシテ精良ノ製糸ヲ生スヘキノ上品ハ得ラレサルモノナリ又下等ノ種ニ至ツテハ如何ニ季候ノ適度ヲ誤ラス良桑ヲ用ヒテ上手ニ飼育スルモ連々細蠶ヲ生シ蠶虫ノ全揃スルコトナク上簇ノ頃ニハ終ニ數百頭ヲ以テ數フルニ(原種壹枚揃立ルモ)減少スルモノナリ且桑質ハ蠶虫ヲシテ糸ヲ造ラシムルノ原素ニシテ是ナケレハ蠶繭ヲ爲スヘカラス故ニ桑最良ナレハ繭隨テ最良トナリ桑下等ナレハ繭亦下等ナリ只ニ繭ノ下等ノミナラス蠶兒ヲシテ虛弱ヲラシム是ヲ以テ宅舎際或ハ林下等ノ照桑ヲ與フルルハ之カ源ヲナソ種々ノ蠶病ヲ發スルモノナリ以上原種ト桑質ト養蠶ニ緊要ナル所ナリ然レ是ヲ飼養ノ點ニ比スレハ未タ其關係輕シト云フヘシ如何トナレハ原種桑質ノ二項ハ最下ノ品ニアラサレハ飼養其宜キヲ得ルルハ多少取獲スル所アリテ之カ皆無タルコト稀ナリ若シ夫飼養其法

ヲ失ヒ之ヲ未熟ニスルハ譬令何等ノ精撰種ニシテ如何ナル良桑ヲ用ヒ養フニ
一旦不時ノ季候ニ遭遇スレハ忽チ病蠶トナリ終ニ一類ノ繭ヲ見ル能ハサルニ
至ルヘシ爰ヲ以テ此三緊要中飼養ヲ以テ最モ緊要ナリト云フ所以ナリ
德江八郎 此三點中原種ヲ以テ第一トシ桑ヲ以テ第二トシ飼養ヲ第三トナスヘキ
ハ天然物タルノ理ニ於テ尤モ然ラシムルモノナレト爰ニ意見アリ則チ之ニ反ス
夫レ此蠶タルヤ人家ニ養ワレ今己ニ良種アルモ粗種アルモ又良繭ヲ得ルモ粗繭
ヲ得ルモ皆飼養法ノ良否ニ因テ出來ルモノナルハ何ソヤ是則チ天然物タルモ漸
ク變遷シテ十分ノ七八人造物トナリタルノ理ナルヘシ此權衡人造ニ重キハ飼
養ヲ以テ緊要中ノ第一ト云サルヲ得ス若原種ヲ以テ緊要中ノ第一トシ飼養ヲ第
三ニナクトセハ七分ヲ天然物トシ三分ヲ人造トナスノ理ニ由リ自然適蠶ノ養法
ヲ研究スルナク氣候ハ天然ニ委テ豐凶其年ニ生スルモノトシ粗繭ヲ得レハ原種
ヲ惡ミ不作アレハ罪ナ年ニ歸シ或ハ神ヲ祈リ或ハ佛ヲ念シ改良進步ヲ謀ルコト能
ハサルノミナラス或ハ年ニヨリ一類ノ繭ヲ見ル能ハサルノ失敗ヲ來スコアル
ヘシ故ニ養蠶ハ人造ニ重クシテ天然ノ氣候不順ナルモ凌キ得ラルハノ理ヲ推考

シ飼養ノ適宜ヲ研究スルコト最モ緊要トナスヘシ依之第一飼養法第二原種ノ上等
質第三良桑トスヘシ

木村九藏 德江君ノ説ニ同意ナリ

第二條 桑ノ善惡ハ新古ニアル歟

松井庄作 桑樹ハ新ヲ以テ最モ良トス何ントナレハ凡草木ハ皆新木ハ有機体則チ
動物性ノモノヲ吸收スルコト多ク古木ハ之ニ反シ無機体多クシテ自然滋養分ノ吸
取少キヲ以テ蠶兒ニ與フルモ隨テ滋養分少シ只ニ滋養分ノ少キノミナラス却テ
幾分ノ害アリ且蠶種ヲ製造スルニ新桑ヲ與フレハ多分ノ分ヲ得ルナリ古木ハ否
ヲス桑ノ葉ニ細虫多分ニアリテ蠶兒之ヲ食スルハ大ニ害ヲ受ケ竟ニ蛾ニ化ス
ル少クシテ多ク「ウジ」ニ化スルナリ是實ニ經驗上ノ説ナリ併シ小生モ植物學動
物學化學等ノコトハ更ニ通セス只實際自己ノ經驗ヨリ得タル處ヲ述ヘタルモノニ
シテ縱令ハ新ハ勢力盛ナルヲ以テ滋養分ヲ吸收スルコト多ク古ハ老人ノ如ク自然
其勢力衰フルヲ以テ滋養分ヲ吸收スルコト少キヲ以テナルヘシト考フ

眞下珂十郎 新桑ヲ良トスル松井君ノ説ヲ賛成ス
橋本良平 新桑ヲ良トス然レモ新ニ度アリ植付ケテヨリ二三年ヲ經サレハ桑ノ勢
力十分ナラサルヲ以テ四五年ヨリ十ヶ年マテノ間ヲ最モ良トス併シ肥料ヲ十分
ニ與フレハタトヘ十五年廿年後ノモノト雖更ニ害ナカルヘシト信ス
小泉信太郎 新桑ニハ酸素多シ然ルニ酸素ハ糸ニナルノ元素ナリト聞キ及ヘリ故
ニ新桑ヲ良トス

岡田三郎 平垣ノ地山間ノ地ニヨリテ種々異ナルモノナレハ新古ヲ以テ一概ニ論
ス可カラサルモノナリト雖モ我地方ニテハ新桑ヲ良トス

野村藤太 新古如何ハ未タ判然セス只我地方ニ於テ小生カ經驗スル所ヲ以テスレ
ハ地味ノ良キ所ハ古ヲ良トシ地味ノ惡シキ所ハ新ヲ良トス

宮下六三郎 小生地方ニテハ古ヲ捨テ新ヲ植ヘ肥料ヲ與フルヲ良法ナリトセリ己
レモ五十年間實驗シテ一度モ養蠶運作ナキハ蓋シ此法ニヨリテナリト考フ

野原吾八郎 小生ハ今年ニテ十四五年經驗スルニ新ヲ良トス
横堀庄八 新古如何ハ其風土ニヨリ大ニ異ナルナリトモ然レモ我地方ニ於テハ新

桑ヲ以テ良トス其所以ハ地方養蠶者擧テ十年ヲ限ルト云ヒハナリ

古澤花三郎 桑ノ善惡ハ新古ノミニ係ハラヌ眞ノ善良ナルハ川縁ノ如キ風氣流通

最モ宜シキ地ヲ新開シ桑ノ良種ヲ撰ミ十分ニ培養シタルヲ可トス是レ桑ノ種類

ニヨリテ取獲ノ多ク且蠶ノ食シテ爲メニヨキモノアレハナリ殊ニ新桑ハ古木ノ

葉ニ所ナキノ清爽ノ味ヲ含メリ故ニ可成十ヶ年目毎ニ植換テナスヲ良トス

關口源七 桑ノ善惡ハ一概ニ新古ヲ以テ其如何ヲ判定シ難シト雖モ余年來親試實

驗スルニ先ツ植付ヨリ十年迄ヲ最モ良ト思考ス何ントナレハ新桑ヲ以テ飼養ス

ルハ蠶兒強壯ニシテ成繭ニ至ツテモ取獲多量ヲ得レハナリ其所謂ハ余養蠶ニ

従事スル久シク去ル十余年前迄ハ其結果意ノ如クナラサリシカ種々苦心植付

ヨリ三年目迄ノ桑ヲ以テ初眠迄ニ與ヘ五年ニ眠七年三眠九年四眠迄ト如斯蠶兒

ニ從テ桑ノ年度ヲ斟酌シテ飼養セシニ果シテ十分ノ取獲ヲ得タレハナリ

徳江八郎 桑ノ善惡ハ新ニアラス將タ古ニアリト云ニ非ラサレモ良質ニシテ根ニ

勢力アルモノヲ善トナスニ外ナラス故ニ植付十年以後ニシテモ培養ノヨク届キ

タル株ニ枯レナキモノヲ以テ最上トス

木村九藏 德江君ノ説ニ同シ

午後二時十分開議

會長 速水堅曹 本日ハ西郷農商務卿臨席セラレ、ヤモ知ノス豫メ諸君ノ心得マ
テニ報告ス

楫取群馬縣令森群馬大書記官其他屬官臨席セラル

第三條 桑植付方ノ

小泉信太郎 當縣下綠野郡藤岡町北在ノ地ニテハ寒前ニ地ヲ深サ三尺程巾二尺程
ニ掘リサクノ間ハ五尺五寸ヨリ六寸迄ヲ度トシ桑ノ間ハ二尺七寸ヨリ三尺迄位
ニ植付ケ寒四十日程前ニ駄肥ヲ踏込ミ其上ヘ乾キタル土ヲフリカケ桑ノ根ヲ南
ヘ向ケ一反歩ニ六百本位植付ケルヲ通例トス

桑島餘太郎 土地ノ寒暖或ハ山地或ハ平地ニ依リテ桑ノ植付方種々アリ平地ニテ
ハ六百本位ニテモヨロシサクハ六尺余リニシテカベハ三尺ヨリ狭クモ妨ケナシ
サクノ廣キハ第一風氣ノ流通ヲヨクシ第二耕耘ノ便利アリ且ツ人力ヲ省キテ馬

力ヲ借ルニ便ナレハナリ

橋本良平 桑ノ植付方ハ土地ノ厚薄地質ニヨリテ別アリ春ノ彼岸ヲ以テ最モ植付
ケニ適シタル候トス余リ植付ノキ肥ヲ多分ニ與フルハ却テ害アリ地ユシラヘノ
前ニ肥ヲ施スナ可トス

眞下珂十郎 土地ノ狀況ニヨリ異ナルヘント雖モ根刈桑ハ六百本位高木ハ三百本
位植付ケテ可ナリ且西上州ニハ桑疫病ト云フ一種ノ桑病アリ之ニ罹リタル桑ハ
始メ二三年間ハ生立ヨケレモ其後追々枯凋ムノ病ナリ此病根ハ桑ノ根ニ一種ノ
虫ヲ生シ之カ爲メニ枯ル、ナリ故ニ之ヲ防クハ石灰ヲ桑ノ根ニ入レ其上ヘ桑ヲ
植付ケレハ其害ヲカルヘシ

松井庄作 我上田地方ノ如キハサクノ巾三尺五寸ヨリ三尺位ニテ一反歩ニハ千株
位植付ケルヲ通例トス且製糸ニ名ヲ得タル舊上田城南カモ池ト唱フル地ハ砂地
ナルカ五尺位深ク掘リテ植付ケルヲ普通トス

午後二時廿四分西郷農商務卿及富田大槻兩書記官臨席セラル

金子逸平 赤城山中ニテハ立木ト云フテ萬年桑ヲ植付ルニ一反歩ニテ極細カナル

モノ五十本位ナリ上等肥料ノ届ク所ハ三間四方ニ一本植付ル位ノ割合ナリ
宮下六三郎 桑ハ成ルヘク深ク植付土ヲ僅カ掛ケヲキ追々埋メルヲ可トス且成ヘ
ク遠ク植付ルヲ良トス

古澤花三郎 植付方ノ季節ハ春ナレハ彼岸前後秋ナレハ十月中旬ヨリ十一月上旬
迄ヲ限ルヘシ根刈桑ハ幅五尺トシ二尺五寸ノ距離ニ植エヘシ一反歩ニハ凡九百
貳十五本トス一坪三本餘ナリ中株ニ仕立ルニハ幅六尺トシ距離ヲ三尺ニ植ヘシ
一反歩ニハ凡六百十二本一坪ニ二本餘ナリ高株ニ仕立ツルニハ一坪ニ一本ヲ植
エヘシ併シ植方ハ何レモ穴方二尺深サ二尺ヨリ二尺五寸ヲ掘リ堆肥ヲ細土ト平
分ニ混和シ凡ソ七八寸程其底ニシキ其上ニ苗木ヲ据ヘ末土ヲ覆ヒ埋ムル一尺
許ニシテ上ヲ踏ミ付ケ苗木ハ地上ヨリ三四寸上リタル所ヨリ芽ノ三ツ四ツアル
様切斷スヘシ尤モ植付ケノ位置ト株ノ距離ハ土地ニヨリテ便宜ニ任セ風氣流通
宜シキヲ專一トス

關口源七 桑植付方ニ付テ我地方ノ一般ヲ云ハ、取木苗ハ春彼岸前ニ掘採リ其曲
リ工合ヲ見成ルヘク大曲リナキ様切斷シ大根ヲ南ヘ向ケ深サ八寸位ニ植付ケ土
ヲ掛ケ上ヨリ踏付ケ土際ヨリ四寸位上リ切取ルヲ良トス又實生ハ掘取リ赤キ根
ノ苗木ヲ除キ黃色ノ苗木ノミヲ撰ミ根揃ヲナシ五六寸ニ切り二本ツ、植ルヲ良
トス尤モ三本或ハ五本モ植ルモノアレントモ到底眞ニ生立ツモノハ二本ニ限ルモ
ノナレハ多分植ルモ益ナカルヘシ而シテ黃色ノ所ヨリ上二三寸土中ニ入ル様土
ヲ掛ケ踏付土際ヨリ三寸上リ切採ルナリ右採木實生何レモ植付肥ヲ施スハ却
テ害アリ根付キノ時節ヲ計リ苗木ヨリ五寸餘距レ淺ク穴ヲ掘リ人糞又ハ小便等
ヲ施スヲ良トス

徳江八郎 桑植付方ハ深淺廣狹共各地土質及ヒ氣候ノ異ナルニ從ヒ酌量スルニ若
カス然シ我地方根刈桑ノ如キニ於テ廣狹ノ便利ヲ云ハ作ハ六尺ニシテ「カベ」ハ
早中晩ノ三種ニ從ヒ一尺五寸ヨリ二尺三尺ト次第ニ遠キヲ良トス

第四條 桑畑肥料ノ事

小泉信太郎 肥料ハ土用ニ入り一反歩ニ大豆一石寒中ニ大豆一石代價丈ケノ干鰯
ヲ與ヘ寒明ケ下肥トメ粕ヲ交セテ與ヘ其外少シ駄肥ヲ與フルヲ良トス

眞下珂十郎 養蠶ノ頃刈リ取りタル跡へ肥ヲ與フルヲ可トス且肥料ハ其地味ニヨ
リテ別アリ其地味ノ如何ヲ察シ桑ノ滋養分ニ不足ヲ補フヘキ品ヲ撰ミテ與フル
ヲ可トス一方ニ偏シテ肥料ヲ與フルハ宜シカラス且「磷酸」ボツター「シユム」ノ如
キモノヲ用ユレハ自ラ其内ニ滋養分アリテ必ス功ヲ奏スヘシ
宮下六三郎 寒氣ニ向フ前ニ願クハ鳥糞ヲ肥ニ交セテ與ヘタシ其故ハ鼠ノ桑根ヲ
喰ヲ防クノ一法ナレハナリ
西郷農商務卿 拙者モ肥料ニ付テ聊カ意見ヲ述ヘン先ツ第一ニ太陽ノ光線第二地
主ノ足跡第三ニシノ粕夫ヨリ牛馬ノ糞レタルヲ良トス然シ第一第二ヲ以テ最モ
肝要ナリトス諸子夫レ是ヲ熟慮セヨ
岡田三郎 農商務卿閣下ノ示サレタル地主ノ足跡トハ實ニ感服ノ至リナリ然シ草
ヲ刈取り肥料ニ充ツルハ最モ宜シトス
松井庄作 我上田地方ニテハ寒中ヨリ早春ニカケ肥料ヲ十分ニ與フルヲ良トセリ
然シ刈取タル際ニ與フルハ宜シカラストス
武藤幸逸 何分我地方ニテハ運搬ノ不便ナルヨリニシテ干鰯等ノ肥料十分ニ行ハ

レカタン然シ糞牛馬ノ肉ヲ四尺位ノ桶へ入テキ五六日過キ腐敗スルヲ待テテ追
々水ヲ入レ之ヲ肥料ニ充ツレハ大ニ桑ニ適シ頗功驗ヲ見ルナリ實ニ無用ヲ轉シ
テ有用トナス一大良法ナリト云ヘシ
橋本良平 四季ノ内寒肥ヲ最モ可トス而シテ我地方ニ於テハ「粕」ヲ以テ最上トス
魚肥ヲ十分ニ與ヘタル桑ハ桑葉ハ美ニシテ蠶下ノ乾ク「妙」ナリ人糞ヲ用ユルモ
亦可トス
古澤花三郎 一反歩ヨリ收穫スル所ノ桑ヲ幹トモ凡ソ一ケ年四百五十貫トス此内
七分ヲ水素トスレハ三分則チ百三十五貫ハ葉及棒ノ枯乾シタルモノナリ此ヲ焚
テ灰トナセハ百分五則チ百五拾目ナリ此無機物ハ表土中ニ含有スル則チ四
百五十貫目ノ桑ヲ生育スヘキノ原素ナリ肥料少ナケレバ隨テ生長惡シク肥料多
ケレバ隨テ生育スルハ此原素ノ増減ニヨルモノナリ且耕耘ノ深淺ニ關係モ少カ
ラスト雖此原素ヲ養成スヘキノ肥料ヲ施サレバ「カ」ヲス且肥料ヲ施ヌト一周
年三回トス即チ春萌芽前ト伐採後ト冬季トス而シテ春ハ大豆ノ挽割酒粕米糠等
ヲ糞水ニ混和シタルモツ伐採後ハ馬舎肥堆肥糞糞枯草等冬季ハ「粕」油粕醬油粕

干鰯鳥糞等ヲ施スモノナリ但シ之ヲ施用スルニ注意スヘキハ害虫ノ件ナリ凡虫
害ハ肥料ヨリ發スルモノ多シ其肥料ニ至リテハ數種アリト雖モ之ヲ施用スル腐
敗ノ度ト時節トヲ計ラサルヘカラス此腐敗ノ度ト時ノ氣候トニ因リ害虫ヲ生ス
ルモノナリ尤モ肥料ハ余リ腐敗スレハ効用薄ク其度未ダ適セサレハ害虫生シ易
シ故ニ能ク醸造シテ施用スヘキナリ此件ニ就テハ現ニ其例アリ余ノ郷里ハ荒川
北縁ニ沿セル村落ニシテ同川縁ノ桑園凡ソ百町歩内外ニ而シテ明治七八年頃
馬糞ト唱ヘ斃牛馬ノ骨肉ヲ切斷シ樽ニ詰メ是ニ水ヲ加ヘテ數日ヲ過キ少ク腐敗
セシメハ直ニ之ヲ賣却スルモノアリテ一時ハ大ニ賞賛シ桑園ニハ無二ノ良肥ナ
ト唱ヒ所々ニ用ユルモノアリ其項村内某ナルモノ之ヲ購求シ僅カ一反歩計リノ
場所ニ施用セシカハ季候不順ニ際會セシヤ不幸ニモ其翌年ヨリ桑樹ニ一種殊別
ノ尺獲虫ヲ發シ漸ク蔓延方今殆ト五十余町ニ及ヘリ連年驅除ニ盡力スルモ退
除スルコト今ニ能ハサルナリ是ノ原因タル僅カニ一反歩ノ馬糞肥ヨリ發セシモノ
ナリ注意セサルヘケンヤ

德江八郎 桑畑ノ肥料品ハ其人其土地ニ便宜ノ物ヲ用ヒ然リトス雖モ培養ノ時

節及ヒ分量ノ適度トスル處ハ譬ハ十分ノモノ寒中五分芽出シノ際三分伐採後二
分ヲ與フルヲ順序トス

木村九藏 德江君ノ說ヲ賛成ス

西郷農商務卿午後二時五十五分退場セララル

第五條 蠶種貯方ノ事

高井梅吉 蠶種貯方ハ冬至ニ至リ種紙ヲ種ノ付キタル方ナ内ニ四ツニ折箱ニ入レ
ナキ清明ノ頃取出シ掃立ノ用意ヲナスヲ通例トス

小泉信太郎 蠶種ノ貯方ハ瓶ノ中ニ柵ヲ鉤リテ瓶ニ直接セヌ様注意シテ圍ヒテ
ヲ第一トス瓶ハ南向ノ所ニナキ目張ヲナシ取出ス時瓶中ノ溫度ハ五十三度位ヲ

可トス夫ヨリ追々暖室ヘ轉スヘシ俄ニ温涼場所ヲ易ヘテハ宜シカラス

小茂田文衛 天井ヨリ二尺モ離レテ掛ケナキ冬至ニナリ箱ノ中ヘ入レ春ノ彼岸ニ
至リ鴛室ヘ出スヲ通例トス

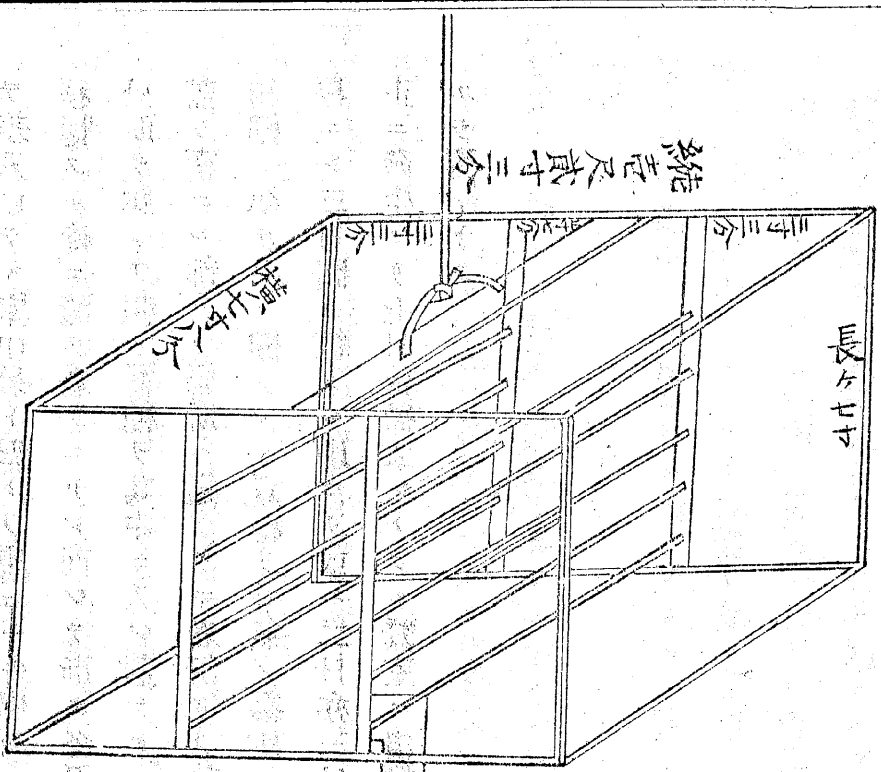
古澤花三郎 卵ハ己ニ雄蠶ナレハ製造ノキヨリ大切ニ扱フヘシ先ツ第一ニ濕氣ナ

ク暖氣ノ盛ナラス寒氣強カラスゴミ煙リハ勿論人畜ノ呼吸氣ナク壁際ハ又ハ鼠ノ往還ヲ除ケ空氣ノ循環シ最モ平和ナル場所ニ掛ケタクヘシ而シテ秋ノ彼岸ニ至ラハ六面紙張ニシタル祭燈籠ノ如キ箱中ニ入レナキ春ノ彼岸ニ至ラハ箱ヨリ取リ出シ裸種トシ掛ケナキ桑ノ芽サスト蠶ノ發生スルト緩急遲速ナキ様注意スヘシ

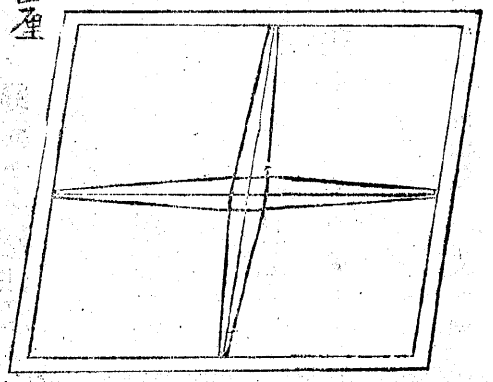
關口源七 他ヨリ蠶種ヲ購求スルキハ成ヘク其家ノ氣候ヲ受ルタメ秋土用前ニ取入レ家ノ中央ナル處ヘ掛ケナキ惡シキ香又ハ烟等受サル様恰モ兒蠶ノ如ク扱ヒ貯テ良トス

木村九藏 余カ蠶種製造ニ從事スル年アリ今ヲ去ル十余年前明治四年ノ頃ヨリ以爲ラク蛾ノ紙上ヘ卵ヲ附スル自然ニ糊莫質ヲ帶フルニヨリ紙上ニ糊着スルモノニソ且柔軟ナルニヨリ暑ト濕キチ厭フ最モ緊要ニシテ將タ俄カニ乾サント冷氣ノ箇所ニ提ナクモ風劇シキキニ至ツテハ卵紙ヲ變動スル等ノ患ヒアリ或ハ紙中ノ卵ヲシテ全ク安着セシメサル以前ニ乾カス時ハ其害發生ニ至ツテ現出シ來ルモノナレハ卵紙ヲ貯ニ恰好ノ掛棚ヲ設ケ殆ント蠶棚ノ小ナル如キモノニナシ

テ差入レナキ室中暑ト濕トノ患ヒナキ場所ニ据ヘ時候ノ變遷ニ注意シテ諸方ヘ移轉スル時ニ隨テ爲サルナレ而シテ漸ク冬至前ニ至ルマ更ニ左圖ノ一棚ヲ製シ外面ヲ紙ニテ張り蠶種ヲ其中ニ入レ蓋ヲナレ又更ニ松板ニテ外箱ヲ製シ同シク蓋ヲ密ニシ都合ノ場所ヘ据ヘヲキ春清明ノ前後時候ノ滴度ヲ計リ箱ヨリ取出シ掛棚ノ紙ヲ去リ棚ノマ、蠶種ヲ冷氣ノ場所ニナキ煙ト濕氣トヲ厭ヒ空氣流通ヲ專ニシ三日間モ經タル頃ヨリ或ハ二日亦三日ト追々南方温暖ノ方ヘ向ケテ送り正ニ發生ヨリ七日前掃立ントスル蠶室ニ掛棚共ニ移シ氣候ノ變異ナキ様注意スルヲ專一トス



共同寸三分四厘
共同三分



徳江八郎 蠶種貯方ハ寒中迄空氣清淨ニシテ風濕烟霧ニ害セラレサル場所へ提ケ
 チキ寒明キニ至リテハ冷氣ノ場所へ貯へ然シテ發蠶ノ期日ヲ計リ該發蠶ノ期日
 五日以前ニ兒蠶ヲ養ハントスル室ニ出シ二尺七八寸四方アル紙ニ包ミテ蠶架へ
 平面ニラキ以後華氏寒暖計六十四度ヲ下ラサル様注意發蠶セシムルヲ可トス

第六條 掃立ノ一

宮下六三郎 掃立ニハ成ルヘク鳥ノ羽ヲ用ヒサル様シタシ蠶ノヨレル恐アラハナ
 リ故ニ先通例ノ紙ヲ六枚位ツキ之ニ種一枚ヲワセ蠶ノ出ルルニ其種ヲツツト仰
 向ケニナシチキ桑ノ花ノ青キヲ手ニテモミ振り掛ケ與フルヲ通例ノ法トス
 小茂田丈衛 掃立ノ日午前十一時頃ニ包ミ紙ヲ開キ其上ニ粟糠ト桑ヲ細カニ切タ
 ルトチ交セテフリ掛ケルナリ是ヨリ前種紙ヲ粹リニ掛ケチキ蠶兒發生後穀紙ヲ
 試ミテ蠶量ヲ定メ一匁ヲ尺坪四坪位ニチキ夫ヨリ毎日分量ヲ立テ廣ケルヲヨシ
 トス

桑島鎌太郎 掃立前種紙二枚ヲ合セテ包ミ置キ一時ニ發生スル様寒暖ヲ計リ凡ソ

八九發生ヲ見認メ鳥ノ羽ノ柄ニテ裏ヨリ打ガニ落ヌヲ可トス掃立ノ時刻ハ午前十一時ヨリ十二時迄ヲヨントス蠶量一匁ヲ尺坪三坪ニ散布スヘシ此時與フル桑ハ一日前ニ切取リタル桑ヲ良シトス且之ヲ種々細密ニ切リテ與フルナリ青木武平 發生スル時分乾濕ノツケ方ニヨリテ發生難易アリ當年ノ如キハ原種一枚ニテ通例五萬發生スヘキモノカ四萬ノ發生ニ止マレリ其所以ハ乾キノ過キタル故ナリ余リ乾キ過タリト思フキハ紙ノ裏ヨリ水ヲ引テ濕リ氣ヲ持セ掃立ルヲ可トス

望月又八郎 掃立方モ地方ニヨリテ種々アレモ小生等ノ實行スル所ハ紙ニ包マス先ツ發生ノ時ニ至レハ籠ノ上ニ紙ヲ敷キ十二時頃ニ桑ヲ與フルナリ

松井庄作 我上田地方ニテハ掃立ノ日撰ムテ肝要トス乃テ雨天ヲ嫌フナリ先ツ最初ノ日十中ノ三位出タルキハ掃立ズ翌日十ノ七位出タルキ之ヲ掃クナリ

高草木新重郎 雨天ニ掃立ヌトハ至極名論ナリ併シ發生シタルモノヲ掃立スニテクハ却テ惡シカルヘシトノ考ヘヨリ雨天ニモ拘ハラヌ掃立ツレモ桑ヲ與ヘヌ前ナレハタトエ發生シテモ一兩日位桑ヲ與ヘサルモ決シテ差支ナキ様子ナリ岩代

邊ニテモ其例多ト聞ク且掃立ニハ一種ノ桑ノミナ與ヘヌ數ヶ所ノ桑ヲ持寄セ何時間カ貯ヘ置キ軟カナル所ヲ細カニ切り與フルヲ可トス且掃立桑ニハ後日雨露ノ障リチキタメ清水ヲ三滴或ハ五滴位澆クヲ可トス粟糖叔糖ヲ交セルハ乾カセル爲メナリ掃立ハ鳥ノ羽ヲ用ユルモ決シテ妨ケナク却テ便利ナリ

井草泰三郎 小生ハ温暖育メ掃立方ヲ述ヘンダナムシテ見テ紙ニ包ミ七十五度位ニナセハ翌日十時頃ニハ大概發生スルモノナリ故ニ十分出テタルキ掃立ツレハ一度ニテ掃立ラルヘシ成ルヘク數回掃サルヲ可トス

渡邊明義 小生ハ伊達ニ掃往シ畧養蠶ノ工ヲ知リダレハ我福嶋縣下ノ掃立方ヲ述ヘン先ツ掃立ノ日程前ニ蠶室ヲ掃除シテ火ヲ熾キ烟ヲ籠メ其後明ケ開ヒテ空氣ヲ掃ヘ嗅キ抜キ日張ヲナシ而シテ掃立ハ從來紙ノ上ヘ掃クノ習慣ナリシカ當今ハ直チニ叔糖ヘ掃交セ蠶座ヘ掃ケテ桑ヲ與ヘルナリ

古澤花三郎 晴明ノ頃毛蠶ヲ飼養シ爲サシトスル蠶室ニ種々移シ種紙ノ上下トニ細キ付之ヲ毎日上テ下ト釣替ヘ暖氣ヲ隨テ漸ク紫色ヲ變シテ青色ニナルナリ毎日掛ケ直ガ水ノハ僅ニ種紙咫尺ノ所ニテモ發生迅速アルモノナリ蠶室ノ温度

ハ華氏ノ六十六七度ヨリ七十七八度ヲ止トシテ發生ニ至ル迄段々温度ヲ増ス様
日夜注意ヲ要ス此時ニ當リ猥リニ室ヲ替ヘ又ハ已ニ發生ニ近ク青ミタルヲ冷度
ノ所ニ仕舞發生ノ期ヲ斟酌スルカ如キヲ爲サハ最も大害ヲ生ヌヘシ若シ此害
ニ罹リタルモノハ如何様ニ手ヲ尽スモ決シテ上作セサルモノナリ扱テ蠶兒ノ發
生ヲ始ルヤ先ツ最初ノ發生ヲ掃キ取り是ヲ方言ニテ虫バキト云フ而シテ原種ハ
縦三尺五寸横三尺ノ紙ニ包ミ延テ敷サル籠ニメセ糊ニテクナリ翌日十時頃ニ至
リ發生ノ分量ヲ見テ蠶籠ヲ延テ敷イテ其種ニ粟糖ヲフリ二三十分時間ヲ過テ蠶
ノ登リタル頃豫テ種紙ノ裏ニ付タル紐ヲ持テ裏ヨリ細キ箸ニテ打落シ其出殘シ
種ハ又紙ニ包ミテキ翌日ニ及シテ尚前ノ如クス而シテ其掃卸シタル蠶ハ目方ヲ
試ミ蠶一匁ヲ以テ尺坪六坪ノ目付ニ擴ケヘシ但掃立ニ際シ只天然ノ季候ニ任セ
少モ火氣ヲ用サレハ大ニ寒暄ノ昇降アリ數日ニ涉ルトアルモノナレハ能ク注意
シ障ノ生セサル様火力ヲ假リテ適度ヲ定ムヘキナリ是余カ實施來リシ所ナリ
横堀庄ハ毛蠶目方一匁ヲ桑茅又ハ桑葉ヲ細末ニ切タルヲ適宜ニ與ヘ三十分時間
程ヲ經古キ延ニ粟或ハ叔糖ヲ散布シソノ上半籠以上ヨリ一籠迄ニ播養スルヲ佳

トス

關口源七 掃立ハ豫メ氣候ヲ計リ桑葉ノニタ葉開クト蠶兒ノ發生スルト遲速ナキ
様寒暖計七十六七度ヲ目的トシ三四日前ヨリ温メ發生セシムルヲ良トス而シテ
發蠶ハ午前十時ヨリ午後一時迄ニ掃立テ濕ヲ忌ムト肝要ナリ
木村九藏 先蠶兒ヲ掃立ルハ午前十一時ヨリ十二時迄ヲ佳トシ恰好ニ繼テキタル
包紙ヲヒラキ其上ニ卵紙ヲ据ヘ卵紙ノ上へ粟糠ヲ散布スル恰モ毛蠶ノ見ヘサル
ヲ度トス而シテ其上へ切桑ヲ掛ケ凡十分時間ヲ經毛蠶ノ切桑ニ登ルヲ見テ卵紙
ヲ取り羽簾ニテ包紙ニ移ス而シテ羽簾ヲ又左右ニ持テ極メテ鄭重ニ混和ス其毛
蠶ト粟糠ト切桑トヨク混和シタルヲ包紙ノ上ヘヨキ程ニ播散シ更ニ又切桑ヲ與
ヘ十分間ヲ經テ度トシ兼テ用意シテ叔糠ヲ凡厚サ七八分通散布シシタル器ヲ
取リ(一尺ヲ一坪ト定メ六坪ニ區分シタルモノ)都合ノ場所ニ据ヘ羽簾ヲ左右ニ
持テ前ノ如ク一層注意シテ混和シテ左手ノ羽簾ヲ、キ右手ノ羽簾ニテ左掌ニ鄭重
ニ扱ヒテ紙上ヨリ器ヘ移ス其時毛蠶ノスレ合ハサル様ナヌヘシ右散布シ終
ルヤ直チニ又切桑ヲ與フ此際切桑ノムラカケアルハ隨テ毛蠶ニ障リテ及ホス

患アレハ余ハ此際ニ與フル切桑ヲ居並ヒ桑ト名付ケ方一分五釐ナル六角節ヲ以テ該切桑ヲムラカケナキ様與フルナリ

徳江八郎 掃立方法ハ先ツ二三ノ發蠶アラハ尙等寒暖計ニ注意シ七十五度ニ至ラセ桑葉ヲ摘ミ取リナキ翌日正午ニ至リ蠶種包紙共ニ秤ニ掛ケ其量ヲ試ミ然シテ包紙ヲ開キ該發蠶ノ上ニ糲糠ノ挽割タルモノ五升ヲ散布シ其上ニ桑葉五匁ヲ極細カニ刻ミテ與ヒ廿分時間ヲ經テ之ヲ混和シ延ヘ散移シ又桑葉十匁ヲ極細カニ刻ミテムラチク與ヒ以後ハ三時間毎ニ與桑ス其積面ハ空種ヲ包紙共又秤リニ掛ケ之ヲ先ニ秤リタル量目ノ内ヨリ引去リ蠶量ヲ定メ此量一匁ヲ尺方ニ坪ノ積面ニ播テ以後初眠迄毎日此積面ヲ加播シ九十坪ニシテ初眠ニ就カシム

第七條 寒暖ノコ

横堀庄八 蠶發生ニ先キ戸障子ノ穴隙ヲ閉キ加ルニ室内西北東ノ三方ヘ延又ハ漉紙ヲ張り温度ヲ漏ラサシテ風ノ侵入スルニ防クヘシ而シテ寒暖計ヲ備ヘ七十度ヲ目途トシ降雨又ハ風吹ノ爲メニ十度以上ノ低度ニ及フキハ其半點則六十五度

ノ點ニ止ムル様松ノ割木ヲ燒キ注意スヘシ

古澤花三郎 晴雨ノ燥濕ヲ慮リ寒暖ヲ調和スルハ養蠶緊要中ノ一ニシテ最モ忽ニスヘカラサル所ナリ或人曰蠶蟲ハ白血虫ノ一等類無推骨生族中ノ一種ニソ有節動物ノ一屬羽毛蟲ノ一箇ニ在テ元來野生物ニテ自カラ桑樹ノ間ニ生シ桑ノ葉ヲ食シテ成長シ終ニ其枝間ニ繭ヲ造タルモノナレハ是天然ノ季候ニ任セテ飼養シ敢テ火氣ヲ用ヒテ寒暖ヲ調和スルカ如キハ術ノ委シカラサルカ致ス所ナリト此說生理當然ノ論ト云ヘシ然モ蠶ハ素ト其天然ノ性モ陰蟲ノ一種神經性ノモノニシテ生來脆ク軟ク虚弱質ノ動物ナリ且ツ習性トナルノ諺アリ此虫人家ニ畜ツノ久シク終ニ其性質ヲ一變セシナ知ルヘキナリ故ニ養蠶ヲナスモノ宜シク季候寒暖ニ注意セスンハアルヘカラス而シテ其適度ハ七十度ヲ以テ中トシ六十五度ヲ以テ低度トシ八十度ヲ以テ高度トス此準ニ越ユルキハ寒暖トモニ防カスンハアルヘカラス

桑島鎌太郎 蠶室内ノ寒暖ハ大低七十度以上八十度以下ヲ可トスト雖モ外氣非常ノ低度ニ降ラハ幾分ノ注意ヲ以テ七十度以下六十度以上ニナクヲ可トス然ラサ

レハ備カニ障子一葉ノ紙ヲ隔タリタル冷氣ハ其紙ヲ徹シ蠶坐ニ侵入ス爲メニ蠶坐ハ一ナリト雖モ二分シテ一方ハ暖一方ハ寒ナルノ状アリテ寒暖大ニ其差ヲ生シ遂ニ病蠶トナラサレハ不揃蠶ト爲ス者往々見ルアリ

渡邊明義 度數ハ一定セサレモ伊達大畧八十度以下七十五度位ヲ適度トセリ糸繭ノミ主トスル地ニテハ七十度ヨリ七十五度位ヲ良トス然ルニ信夫郡ノ種屋ニテ清水町佐藤源之助ト云フモノアリ此人ハ八十五度ヲ以テ養ヒ廿八日目位ニテ上ルノ習慣ナルガ幾年トナク實行シテ決シテ失敗シタルコナシ

木村九藏 蠶兒ノ成繭ニ至ル四眠内卯長幾許ノ差アリト雖モ概テ余ハ華比ノ寒暖計ニ據リ七十度ヨリ七十五度ヲ以テ常度トス然ルニ飼養中ノ天然時候ヲ計ル寒ナレハ五十五度ニ下ラス暑モ九十度ヨリ上ラサル者トシ蠶ニ常度ナリトスルニ對シ寒暖共ニ防禦スルノ術逐一スヘカラスト雖モ概テ先寒ニ處シテハ温火ヲ與ヘ勉メテ常度ニ至ラシメントシ其暑ニ際スルヤ豫メ前日ヨリ氣候ノ徵ヲ見ルヲ要シ拂曉ノ涼氣ヲ蠶室ニ仰キ戸牖ノ開閉ニ注意シ又ハ日中室内ニ水ヲ注キ瞬時モ注意ニ怠リ無ク或ヒハ降霜ヲ前夜ニトシ徵候ニ應シテ夙ク温度ヲ與フルヲ

思ヒ又ハ濕風雨露ニ至ル防禦百出善ヲ除キ精神國産ニ猷損アルハ飼養ノ罪ノミナラス天賜ノ善質ニ背クヲ懼レハ寒暑ニ處スルモ易々ナルノミ

第八條 養桑度數及量目ノコト

望月又八郎 暖氣ノキハ増シテ與フルナリ

橋本良平 寒暖ニヨリテ差アレモ凡ソ一晝夜平日ナレハ初眠八九度二眠七八度三眠五六度ナリ兩模様ノキハ多量ニ與フルハ不可ナリ併シ大風ノキハ桑ヲ多量ニ

與フルヲ可トス

横堀庄八 養桑ノ度數ハ寒暖風雨ノ變化ニ因リ多少ヲ加減スルコト肝要ナルハ勿論

ナレトモニ眠迄ハ寒暖計七十度ヲ目的トシ晝夜ニ七度ヲ養度トシ暖氣増加シ既

ニ八十度ニ昇ラントスルキハ一度乃至二度ヲ増スモ可ナリ又ハ東風或ハ降雨盛

ニシテ降度ニ及ハントフルキハ二度乃至三度ヲ減スルヲ可トス

關口源七 發生ヨリ初眠迄ノ養桑度數ハ晝六七度夜三度與フルヲ通例トス尤モ其

日ノ模様ニ依リ之ニ増減アルヘシ然シ桑ノ枯ルヲ見テ與フルヲ肝要トス掃立ノ

養桑一度ノ量目凡一籠十匁ヲ以テ目的トス而シテ原紙一枚ニ付熟蠶迄ノ分量大畧二百五十五貫目トス

木村九藏 今養桑ノ度数ト量目トノ事ニ及シテハ飼器ニ關係在ルヲ以テ余カ從事スル器ノ寸尺ヲ陳ヘ以テ度数目ヲ知ラサントス飼器ノ供用ニ於ケル地方ニヨリ其製チ異ニスト雖モ先ハ慣用ノ器ヲ以テセサルヘカラス其器タルニ様アリ掃立ヨリ四眠中用ユル所縦四尺二寸幅三尺三寸ニシテ其庭起ヨリ以後ノ器ハ縦五尺五寸幅三尺三寸ナリ而シテ原種一枚ヲ量六匁飼養スルノ桑葉及該量目則左ノ如シ

掃立ヨリ初眠迄

一養桑總計 三十五回 平均一日五回

一摘桑總計 五貫八百四十目

但シ壹器平均壹度ノ分量貳拾壹匁位

獅起ヨリ二眠迄

一養桑總計 貳拾九回 平均一日四回八分

一摘桑總計 拾壹貫三百目

但シ壹器平均壹度ノ分量貳拾三四匁位

鷹起ヨリ三眠迄

一養桑總計 貳拾八回 平均一日四回五分

一摘桑總計 貳拾五貫百八拾目

但シ壹器平均壹度分量三拾壹匁位

船起ヨリ四眠迄

一養桑總計 貳拾五回 平均一日四回余

一摘桑總計 六拾七貫零々十匁

但シ壹器平均壹度分量五拾三四匁

庭起ヨリ熟蠶迄

一養桑總計 三拾二回 平均一日四回

一摘桑總計 百八拾三貫四百九拾目

但シ壹器平均壹度ノ分量百三四拾匁

一養桑總計 百四拾九回

一桑葉量總計 貳百九拾貳貫八百貳拾目

德江八郎 養桑度數ハ初眠迄一日ニ付八回トシ以後二眠迄七回トシ以後三眠迄六回四眠迄五回以後四回ヲ定度トシ風雨寒暑ニ應シ又一回ヲ増減スルコトアリ量目ハ發蠶ノ積面十五分但原種一枚ヲ以テ熟蠶ニ至ル迄ヲ五期ニ分テ每一期ノ合量ト其時々ノ積面十分ニ對シ一度ノ平均分量左ノ如シ

初眠前	一度ノ量五匁	合量凡一貫五百目	但日數七日 積面九十坪
同起	同 十匁	同 同五貫八百目	同 同 六日 同 同 八十坪
二眠起	同 廿匁	同 同十五貫二百目	同 同 五日 同 同 三百六十坪
三眠起	同 五十匁	同 同六十七貫五百目	同 同 六日 同 同 五百四十坪
四眠起	同 八十匁 百廿匁四日間	同 同百八十貫目	同 同 九日 同 同 五百四十坪

總計正葉二百七十貫目

第九條 蠶シヤクノ原因及豫防ノコト

古平原吾 シヤリト云ハ蠶ノ病体ニシテ容易ニ治スルコト能ハス然レ大畧參考ノ爲メ述ヘシ或經驗家ノ説ニ依リハシヤリノ起リハ白質ノ細微分子ナリ之ヲ人体ニ譬フレハコレヲ病ノ如キモノニシテ蠶室内ニ發生シ蠶體ニ侵入シテ蠶ノ筋肉ヲ腐爛セシム而シテ甚タ發生ノ速カニシテ頭ノ尖リタル虫ナリ故ニ一々人ノ手ヲ以テ之ヲ殺スコト能ハス依テ此虫ヲ尽サントスルニハ石炭酸ノ人体ニ於ルカ如ク硫酸銅或ハ硝酸ノ如キ劇藥ヲ室ノ壁ナドヘ掛ケ傳染ヲ防クニ若クナシ且傳染シタルモノハ速ニ燻棄ヘシトノコトナリキ

松井庄作 我上田地方ニ於テハ數年前マテハシヤリノ爲メニ大害ヲ受クルモノ數フルニ違アラサル程ナリシカ空氣ノ流通ニ注目セサルヘカラサルノ感ヲ起セシヨリ追々注意シテ近來ニ至リテハ絶テ此病ナント云フモ敢テ過言ニアラサルノ場合ニ立至レリ其原因ハ年々松葉ヲ燻スニ該病ノ爲メ必ス効アリタリ一休松葉ハ濕氣ヲ拂フノ利アリテ其之ヲ拂フ元素ヲ「テレピン」ト云フ由ナリ該病ノ發スルヤ蠶室内濕氣ノアル所ヘ空氣閉塞シ其空氣腐敗スルキハ一種ノ病毒トナリ空氣中ノ有機物直チニ蠶虫ニ附着シ爲メニ此シヤリ病ヲ發スルナリ而シテ該病ハ

傳染性ナルヨシ實ニ恐ルヘキナリ故ニ空氣ノ新陳代謝ヲ注意シカメテ濕氣ヲ去
ラハ必ス該病ニ罹ルノ患ヒヲ免カルヘシサテ上田地方ニテ目下用ユル所ノ空氣
交換器ハ頗ル便利ニシテ價ロモ亦廉ナリ其大畧ヲ述ヘンニブリキニテ經リ一尺
五寸位長サ六尺位ノ筒ヲ屋根ノ上ヘ立テ其口ノ上ニ又家根アリ且袖アリテ風ノ
模様ニヨリ東西南北自由ニ向クヘキ樣構造シタルモノナリ一筒一圓七拾錢位ニ
テ得フルヘキナリ一旦此シヤリ病ヲ發シテハ其治方ハ容易ニ得難カルヘキニ付
十分ニ豫防ニ注意スルニ若カス若シ養蠶器ニ該毒ノ傳染セシカトノ疑モアルモ
ノハ寒中雪ノ中ヘ三十日間モ曝スナ可トス必ス明年ニ傳染スルヲナカルヘシト
信ス而シテ蠶室ノ中央ヘ滑カナル漆塗板カ或ハ煙草ノ如キ空氣ノ感シ易キモノ
ヲ置クヲ可トス空氣若シ閉塞スレバ漆器又ハ煙草ニ濕氣ヲ帶フルナリ之レ空氣
ノ如何ヲ試ミルノ良法トス

田島定邦 豫防法ハアルヘシ治法ハナカルヘシト信ス無血虫ニ治法ヲ施ス可カラ
サルヤ明クシ只之ヲ未發ニ防ク一策アルノミ若シ之ヲ治セント欲セハ必ス藥ヲ
カルヘカラス近來世上ニ一種ノ惡弊メリテ藥ヲ賣ルモノアリ群馬ノ如キ福島ノ
如キ有名ノ地ニシテ若シ一タロ藥ヲ賣ル者アリテ之ヲ世上ニ流布セシメハ爲メ
ニ大ナル弊害ヲ生スヘシ生等ノ頗ル痛心スル所ナリサテシヤリ病ノコトハ小生カ
親族田島武平ナルモノ、家ニテハ蛾ニシヤリ病ノ發セシコトアリ數万ノ蛾ヲ斃シ
タリ其因テ來ル所ヲ尋ルニ全ク空氣ノ閉塞ヨリ生セシモノト認ム其故ハ新築ノ
家ニテ梁低シテ空氣ノ塵塞シタル場所ニチキタルモノ、ミ如斯病ヲ受ケタルヲ
以テ之ヲ証スルニ足ル

橋本良平 全ク濕氣ヨリ起ルモノナレハ常ニ濕氣ヲ拂ヒ空氣ノ流通ヲ自由ナラシ
ムレハ必ス此病ヲ豫防シ得ラルヘシ

横堀庄八 該病ノ原因タル濕氣ヲ受ケ加フルニ室内空氣ノ順環不宜サルニ依ル故
ニ聊カ不可ナル狀景ヲクシテ一時ニ變化スルヲ見レハ恰モ米麥ノ麴ヲ製造スル
ト一般ナランカ之ヲ豫防スルヤ庭ハ成ヘ古クシテ能ク乾キタルヲ用ヒ加ルニ松
ノ枯レ葉ヲモメシ室内煙烟ヲ周到ナラシムルコト一日二回之ヲ施スコト二日或ハ三
日ニ至ラシメハ該病ノ害ヲ防クコトアルヘシ

倉林喜四郎 此病原タルヤ氣候寒暖甚敷ニ過クルカ或ハ大ニ濕氣ニ冒サルコトニ

アリト雖モ又濡桑露桑等ヲ與ヘ或ハ火力或ハ南風等ノ甚敷カ爲メ養桑ノ緩急其度ヲ失スルニ依テサルヲ得サルモノナリ

桑島留治 蠶シヤリハ斃ル、ノ后其身柔軟ニナリ凡一晝夜ニシテ白狀ノモノヲ全身ニ帶フルモノナリ世上喋々スルヲ聞クニ洋名ナ「カルクズツクト」ト云ヒ胃中ニ腐敗物ノ生スルナリ云々然レモ吾人ハ之ヲ信セス只案スルニ濕氣アツテ鬱滯セルニ源因スルモノナラン其豫防ハ之ヲ乾シ且空氣室内ニ鬱閉セザル様ニスベシ

關口源七 蠶シヤリハ掃立ヨリ桑ニ濡ヒアリ亦ハ養養ノ過度或ハ蠶裏ノ溜リタルヨリ發ス之ヲ豫防スルハ筵ヲ敷替ヘ糠ヲ多量ニシキチ蠶ヲ水鉢ニ浸シ惡シキ熱ヲ流除シテ振り攪ケ暫時桑ヲ乾カシ少シツ、與フルルハ防グ「アルペン」且又毛蠶ヨリ三眠迄ノ蠶シヤリハ水ヲ吹掛ケ蠶裏ヲ拔キ乾キタル桑ヲ與フルヲ良法トス

島田清作 黴菌病外皮面ニ白砂狀ノ毛ヲ發スル病ナリ即チ養育ノ室内ニ大氣流通セス且濕潤ヲ含ミ箱上ノ汚糞ヲ精除セスシテ自カラ惡臭等ノ在留スルヨリ蠶身

胃囊中飼食物ニ「ヒルツ」ナル植物ヲ發生スルナリ此植物成長スルニ隨テ枝線ヲ増シ愈殖スルニ及ンテ終ニ外皮面ニ突出ス此時蠶身運動ヲ廢シテ其停立スル位置ニ斃ル其蠶身柔軟ナレモ十二時間ヲ過グンハ凝結シテ硬ク二十四時間ヲ經過スレハ白粉ヲ以テ全身ヲ被包スルニ至ル

木村九藏 全養蠶ニ從事スル既ニ十有餘年ナリト雖モ幸ヒニ蠶シヤリト名ツクル病蠶ヲ飼養セシ「ナシ」幾分力ヲ飼養「尽」タルノ餘慶ナルヘシト自信スルト雖モ亦其病蠶ノ由テ來ル所ヲ知ラサル可ラスト比近ノ該病蠶ヲ得シ者ニ就キ其蠶室ノ位置ヨリ寒暖ニ慮スルノ飼養如何ヤ訪問スルニ概テ皆飼養ノ輕卒ト寒暑ヲ避クルノ術ヲ知ラサル等ニ因ツテ生セサル者ナシ爾來余モ茲ニ意ヲ用ヒ他ノ原因ヲ推スニ或ハ寒ニ侵サレ冷ニ撲タレ風濕雨チ來ダスノ前自然雨氣帶ヒ來ル風ヲ言フ桑濕桑冷ヘ露桑等濕氣ノ爲メ蠶兒ノ健康ヲ妨害セラレ然レ後暖熱ヲ防禦セサルニ發ス原因既ニ斯クノ如シ之カ治方ヲ求ムト雖モ微々タル蠶兒ノ熟蠶ニ近ツキ其治方ヲ行フニ餘日ナク挽回以テ成繭ヲ見シトスル急延危篤ノ病ヲ抱キテ醫ヲ遠擲ニ仰クニ似タリ故ニ余カ該未然ニ飼養ヲ謹ミ敢テ治方ニ汲々タラス單ニ原因ヲ表ノ止ムナシ

德江八郎 蠶シヤリ原因ハ蠶室ノ鬱氣ニシテ且兒蠶ノ期濕氣ヲ受ケタルモノ以後
熱暑ニ遇ヒ發スルモノトス之ヲ注意セハ此患ナシ

第十條 起縮ミノ原因及豫防方ノ一

岡田三郎 起縮ミヲ生スルノ原因ハ休ム前ニ桑ノ不足ナルヨリ生スルモノト思考
ス故ニ休ム前ニ十分ニ桑ヲ與ヘテ豫防ノ第一法トス

松井庄作 小生モ岡田君ト同説ナリ併シ尙他ニ一ノ原因アルヘント信ス寒サノ過
キタルヨリ起縮ミヲ來タスアアリ之ヲ豫防センニハ温度ヲ適度ニシ温暖育ニス
ルニ若クナシ

古平源吾 小生ノ平生見込ム所ノ説アリ彼蠶兒ノ起ルニ當テヤーダビ皮膚ヲ脱ス
ルモノナリ此薄皮ナルハ過度ノ寒氣ニ當リ又ハ食物ノ不十分ナルヨリモ感動ヲ
起スアアルヘシ故ニ其邊ニ注意セハ益豫防ノ榮行ハルハナルヘシ

野村藤太 弊村ハ頗ル濕地ニシテ蠶業ニハ余程困難ナル地ナリ而シテ起縮ミハ最
モ多カリシガ其原因ヲ尋チルニ此地ノ習慣ニテ根桑ヲ採リ之ヲ洗ヒ乾カシテ與

フルル未ダ十分乾カヌ所ヨリ濕氣ヲ増シ必四眠ノ頃ニ起縮ミヲ生シタリ依テ五
年程以前ヨリ更ニ根桑ヲ與ヒサリシニ其年ヨリシテ該病ノ跡ヲ絶々今日ニシテ
ハ其影タモ見ス是實ニ現在經驗上ノ説ナリ

橋本良平 小生ノ意見古平君ノ説ト大畧同シ實ニ皮ヲ脱キタル處ヘ風ニ當リ又ハ
濕氣ヲ受クルヨリ生スヘシ自宅ハ冷氣勝ニシテ殊ニ隣地ニ竹林アリ之カ爲メ大
陽ノ光線ヲ遮キラソ自然若干ノ起縮ミ喰ヒ後ソ等ヲ生スルノ患ヒアリ

關口源七 休ミノ時ヒエヲ受起ノハ與桑ノ後ソタルヨリ起縮ミトナルナリ初眠起
ヨリ始ルハ四眠迄サハリアリ之ヲ治スルヤ裏拔チ心付養桑ノ過分ナキヲ專一
トス

島田清作 疲痕病則起縮ミハ蠶脫皮スル期ニ臨ミ養桑ヲ求メヌ胃囊第二皮膨脹
ア第一皮ヲ穿開シ口ニハ白汁ヲ吐キ肛門ニハ汚汁ヲ漏シ次第第二「シロツクス」
ナルモノ混合ス蠶身次第ニ疲瘦ヲ極終ニハ斃ルハナリ

木村九藏 起縮ミノ原因ハ蠶兒休眠ノ前ニ當テ飼養者暖氣ノ度ニ過キタル時候ヲ
來スアアルニ注意セハ蠶兒ハ未ダ休眠前ノ桑ヲ喰ヒ足ラサルモ暖氣ノ過度ナル

ニ乘シ未ダ食ニ満足セサルモ休眠ニ就モノアルニ係ハラス間休眠セサル蠶兒アルヲ見ルヤ頻リニ桑ヲ與フルニヨリ爲メニ桑濕ヲ嗽ケ前ニ休ニ就キタルモノ起ルニ當ツテ縮ミア病蠶トナルモノナリ概テ皆如斯暖氣ト桑濕ニ感觸スルニ因ラサルナシ故ニ之ヲ治スルノ方第一與桑ノ注意第二氣候ノ變化ニ觸レス第三蠶兒ヲシテ同一ニ休眠ニ就カシムルヲ專要トス

徳江八郎 起縮ハ就眠ノ際養桑不足ナルト眠中濕氣ヲ受ケタルモノ起キルニ日間取リ衰弱シテ此病蠶トナルモノナリ

明治十五年十一月十八日午前十一時十分開會

會長星野耕作 速水氏暫時差支之アルニ付御依囑ニ應レ不肖ナカラ拙者代テ會長

タリ諸君之ヲ諒セヨ

第拾壹條 節蠶ノ原因及豫防方ノ事

角田万作 小生ハ先年自家ノ失敗ヲ述ヘ諸君ノ參考ニ供スヘシ寒氣ノ甚キヲ厭ヒ之ヲ防ント欲シ紙張ヲ釣リ其中ニア掃立ヲオシタル後十日ナシテ其中ハ火ヲ入レタル紙張膨脹シ爲メニ起縮ミノ病生シ後ニ眠ノ頃ニ至テ節蠶アリテ其年

ノ養蠶ハ結局徒勞ニ属シタルコトアリ之ニ依テ考フルニ空氣乾燥ノ過度ナルヨリ生スル者ナルベント信ス

宮下六三郎 諸君ノ説ノ如ク節蠶ヲ起縮ハ全ク空氣流通ノ悪キヨリ生スルナルヘシ

矢島常七 小生ノ經驗ニテハ桑ノウムレヨリモ生シ又蠶ウヲ溜リタルヨリモ生

スヘシ故ニ糠ヲ多分ニ用井蠶ウヲ溜ラヌ様ニシ又桑ノ熱セサル様注意スレハ

此ノ患ヲ防リテ得ベシ且又掃立ニモ關係スルコトナレハ青ミタル種ハ空氣ノ閉テ

サル所ニ置クベシ又青ミ、テ發生ノ遅ハ必ス節蠶ヲ生スルモノナリ

關口源七 フシ蠶ノ原因タル種々アリト雖モ重モニ桑ノ熱亦ハ外氣ノ温度ヲ受テ

テ起ルヲ多シトス

島田清作 水腫病ノ原因ハ脂肪球ノ内部ニ發生スル所ノ植物ヨリ起漸ク蔓延スル

ニ及ンテ血液ノ分色ヲ有ツ所ノ血球内ニ侵入シテ害ヲナシ全身水分ヲ充實シ外

皮ノ皺癢ヨリ蘭裂シ蠶ノ運歩スルニ隨テ白汚汁ヲ漏出シ身色次第ニ變シテ而シ

テ斃ル、ナリ該植物ハ形圓クシテ殆ント脂肪球ニ類似セリ

木村九藏 節蠶ハ冷氣ニ觸レタルカ或ハ濕氣ヲ受ケ然後暖氣其度ニ過キタル氣候ニ際シ生スルモノナレハ此豫防ニ於ケル固ヨリ其因テ來ル所ヲ求メ謹マズンハアルベカラヌ最モ濡葉ト蒸レタル桑ノ類ヲ撰去リ且多量ニ桑ヲ與フルコトヲ第一不潔ナル物ヲ忌ムベシ

德江八郎 此病蠶ハ前年此病アリタルモノ其中ヨリ種ヲ取レハ精撰種ト云ヒ幾分カ必ス發スルモノナリ又良種ナルモ貯方不注意ニシテ不時ノ暖氣ヲ受ケ或ハ蒸氣ニ觸レ飼養法ニ於テモ熱桑ヲ與ヒ且糞糞ニ臭氣ヲ醸シタル如キノ不注意アリテ然ル后鬱暑ニ遇ヒハ過半此病蠶トナル故ニ種貯方及飼養法且桑ノ伐採時刻及其貯方ニ注意スルハ最モ緊要トス然ルキハ原種其質アルモ其害僅カニシテ豫防シ得ラル、ナリ

第拾貳條 明ル蠶ノ原因及豫防ノコト

青木武平 明ル蠶ノ原因ハ休ニ付クキノ蠶ウラノ加減ト起キタルキノ桑付トナ注意スレハ更ニ此患ナカルヘント信ス

矢島常七 明蠶ハ露桑ヲ與ヘタルタメ生スルコトモアリ露桑ハ起眠共ニ害アリ且又明ル蠶ハ休ミ前桑ノ不足ナルト又寒暖ノ不均ヨリ生スヘシ故ニ寒暖ノ度ニ隨ヒ桑ノ度ヲ加減シ一二分起テ桑ヲ求ムル様子アルキハ直ニ桑ヲ與フレハ必ス明ル蠶ヲ生スルコトナシ

古平原吾 小生ノ見込ニテハ空氣ノ不潔乃チ炭酸氣ノ過分ナルヨリ生スル者ト考フ炭酸氣ハ動物ニ大ナル妨害ヲ生スル者ナレハ常ニ空氣ノ新陳代謝ヲ善シ以テ清潔ニセハ必ス豫防トナルヘシト信ス

關口源七 蠶室ノ向ニヨリ乾キ過キ及與桑ニ後ル、ト休ミニ掛リ埋メ蠶ヨリ起ル木村九藏 明ル蠶ノ生スル所以ハ專ラ冷風ト濕氣トニ侵サレ蠶兒已ニ衰弱シタルニ室中火氣ヲ加フルカ又ハ俄ニ温暖過度ナルニ觸レ發スルモノナレハ之ヲ豫防セシニハ第一風冷風乾風濕ヲ防クヲ緊要トス故ニ室ノ戸障子ヨリ回壁ニ至迄透間ナキ様注意シ濡桑ト蒸レ桑ヲ與ヘス南方ノ熱風ヲ恐レ室中鬱熱ナカラシムルヲ要トス

德江八郎 明ル蠶ハ第一露桑ヲ以テ養フニ生ス第二起蠶ノ桑付後ル、ト炭酸氣過

クルニ因ル故ニ此ニ注意セハ此患セナシ

第拾三條 喰後ノ蠶ノ原因ノ事

宮下六三郎 喰後ノ蠶ト云フハ桑ノ回リ方不順ナルヨリ生スル者ナリ故ニ掃立ヨリ桑ヲ切ルニ成丈揃テ刻ミタシ而シテ籠ノ回リヨリ順々ニ與フレハ喰後ノ出来ルコトナシ且成丈ケ薄飼ヲ良トス桑ハ細長ク切ルヲ良トス蠶休ヲ覆ハサル爲メナリ

矢島常七 厚飼ヨリモ生シ亦桑ノ與ヘ方ニモアリ亦寒暖ノ度ヲ失スルニモアリ故ニ桑ヲ平均ニ薄ク與ヘ休ニ掛ルルハ平日ヨリモ五度位寒暖計ヲ昇ラセハ必ス喰後ノハナカレヘシ

橋本長平 喰後ノ原因タルヤ蠶種ノ性質愚キニ因ルト雖モ休ノ桑止メ亦起タルルルノ桑付ノ加減ニモヨルナリ休ノ遅速ヲ見計ロ平均ニ桑ヲ與ヘサル可ラス飼方ハ可成薄ク飼テ可トス

佐藤傳平 喰後ノ原因ニ二種アリ一ハ粗悪ノ原種ヲ用ルルト一ハ掃立ノ際ニ

アルナリ則チ蠶兒ノ發生ハ午前六時頃ヨリ十時十二時頃迄ニ追々ニ發生スル者ナリ故ニ此ノ時桑附ヲ急クサハ發生ノ遅速ニ依テ蠶兒ニ強弱ヲ生スル者ナレハ喰後ノ出来ル也依テ先ツ午后一時頃迄待テ幾ラメ發生シタルルル桑附スルルル蠶兒ノ勢力皆揃フ故ニ一齊ニ食物ヲ喰フコト得ヘシ而シテ桑附ヲ急キタルヨリ生シタルルル防キ得ヘキ者ナリト雖モ粗悪ノ原種ヲ用ルルルヨリ來セシモノハ到茂醫ス可ラサル者ナリト信ス且又如何ニ良種ヲ撰ビテモ發生ノ際桑附ヲ急キ又ハ起キタルルルル同様急クサハ何レモ皆不揃ニナル原因ナリトス故ニ後ノ様急カヌ様注意スルヲ專要トス

高井梅吉 數年經驗スルニ原種ノ良否ニ關スルコト大ナリ即チ上中下ノ三種ヲ養ヒ試ミルニ上種ハヨク揃ヒ中種ハ稍不揃ニシテ下種ハ多ク不揃ナリキ

關口源七 食後蠶ハ第一原種ノ惡シキニヨルト雖モ休ミ人々養桑ノ過分ヨリ濕氣ヲ受ケ發スルモノアリ

木村九藏 凡ソ養蠶中大切ナルルルハ發蠶ヨリ四五日ヲ經ル間ニ越ル時ナレ然ルニ該大事ナル時機ニ際シ尙モ掃卸シテ疎ラウニシ當日午前内ニ一番蠶ヲ方ヲ俟テ

二番蠶ヲ掃クヘキヲ或ハ翌日ニ延スカ如キコアルキハ其怠リヤ毛厘ノ違ヒ千里ニ至ルノ患ヒナシト云ヘカウス且又桑ノ扱ロテ疎陋ニシ或ハ養桑ノ不同ヲ顧ミス或ハ蠶ノスレ合ハサル様薄飼ニスヘキヲ却テ厚ク或ハ室内ノ氣候ニ意ヲ用ヒサル等ノコアル時ハ蠶兒ハ漸々食口後ソテ器中不揃ヲ生シ初眠ヨリ起蠶アリ眠蠶アリ未ダ休眠ニ就カサルアリテ種々病蠶ヲ現出ス余之ヲ恐ル、甚シ故其注意尋常ナラス先ツ初眠ニ先ツ二日前ヨリ養桑ヲ多量ニ與ヒ二三分休眠ニ就クノ蠶兒アルヲ見ルヤ栗糠ヲ振り掛ケ桑ヲ與ヘルコト二回ノ後蠶糞ヲ去リ他器ヘ移シ細ク刻ミタル桑葉ヲ與フルコト亦二回ニレテ休眠ニ就カシム若シ休眠ニ就カサル蠶兒アルヲ見ハ其上ニ網ヲ掛ケ桑ヲ與ヘ網ニ登リタル蠶兒ハ別ノ器ニ移シ休マヌヘン其時與ヒタル桑ハ蠶兒ノ休ニ障ラサハ様能ク扱ヒナハ水敗ノ患ヒナク後ノ蠶ノ出來ルコトナシ

○ 德江八郎 此原因ハ發蠶ノ期氣候不順ニシテ發蠶ニ遲速アルト眠起ノ節冷氣ニ遇ヒタルヨリ生ヌルモノトス故ニ發蠶ノ期ヨリ火力ヲ用ヒテ寒暖計不同ナク一時ニ發蠶セシメ然後養桑數回與フレハ必此患ヒナシ

午後一時四十分開會
第拾四條 成繭絲量多少ノコト
會長速水堅曹 問題中強伸力ノ事アリ然レ共之レハ伊太利ノ生糸改所ニテ始シ
ニシテ製絲家ニモ差シタル功益ハナキ位ナリ況ンヤ養蠶家ニ取リテハ敢テ必要ナル者ニアラス依テ此問題ハ削除シテハ如何
佐藤傳平 小生ハ削除センコトヲ希望ス何ントナレハ生ハ若松ニシテ極ノ新場ナレハ未ダ其器械ダモ見シコトナキ位ナリ然レ共別ニ養蠶ニ差支ナシ故ニ削除シテ可ナリ
會長速水堅曹 尙本條ニ至リ決ステヘシ依テ前會ヲ繼テ意見ヲ述ヘラレヨ
高井梅吉 良種ヲ得テ良桑ヲ與ヘ飼養其法ヲ得レハ必ス良繭ヲ得ラルヘシ
會長速水堅曹 良種ヨリ良品ヲ得ルハ當然ノコトナリ此題意ハ同種ノ者ニテ同種ノ桑ヲ與ヘテ絲量ヲ多分得ル様ニヌルハ如何シテ可ナルヤトノ主意ナリ
松井庄作 絲量多少原因ノ要點ハ實ニ飼養ノ適否ト桑葉ニ肥料ノ十分届キタルト

否トニ依ルハ言ヲ俟タスト雖モ多量ノ糸ヲ得シト欲モハ原種ヲ撰フニ如クナカ
ルヘシ依テ赤引ハ勿論小石丸ト唱フル原種ハ虫ハ赤引ヨリ小サケレ共其質ニ至
テハ赤引ニ亞クモソナリ其桑葉ト手數トノ額ヲ料リ以テ取得スル所ノ繭ニ比較
スルニ右ノ二種ニ若クモソナシ

矢島常七 蠶種ト桑トヲ撰ハサル可ラサルハ勿論ナレ共第一肝要ナルハ飼養ニ在
ルナリ我地方ニ於テ是マテハ八十八夜前後天然ノ氣節ニ任セテ發生ヲ待テタリ
シカ今日ニ至リテハ温暖法ヲ以テ七十五度位ニテ八十八夜前ニハ巳ニ掃立
終ル位ニナスナリ而シテ尚温暖法ヲ以テ日數ヲ縮メ必ス入梅前ニハ巳ニ上ケ終
ル様ニナシ以テ入梅桑ヲ與ヘサレハ絲量多分ニ得ラルベキト信ス

野村藤太 同種ノ蠶種ニテ同種ノ桑ヲ以テ飼養シタル時如何ナル方法ヲ以テ良繭
ヲ得ラル、ヤハ未ダ詳ニ知ル能ハスト雖モ小生ノ實驗スル所ニテハ上ケ桑ニ勢
分ノ強キ桑ヲ與フレハ必ス絲量ヲ増スヘシト思料ス然ルニ弊地方ノ如キハ上ケ
桑ニ薄地ノ桑ヲ用非ル習慣ナリシカ極地質ノユハキ所乃チ厚地ノ桑ヲ與フレハ
絲量ヲ多ク得ルト云フワ古老ヨリ傳ヘ聞キタルニ依テ四五年前ヨリ改良シテ

以後試ミルニ上ケ桑ニ厚地ノ桑ヲ與ヘシニ果シテ絲量ノ多キヲ得タリ

野原吾八郎 小生別ニ見込モナケレ共先ツ温暖育ヲ以テ可ナリトス

佐藤傳平 同種同桑ニテ絲量多キヲ得ント欲セハ桑ノ手置ニ注意スルヲ專一トス
桑ヲ採ミ取り貯ヘ置キ桑葉ノ弱リタルト否ラサルトニ因テ大ニ差アルヘシト信
ス

石原太一 マテシノ乾キタルヲ用非レハ生皮草少クシテ目取多シ

桑島録太郎 絲量ノ多少如何ハ蠶種ノ種類ニ在リ亦養法ト桑ノ善惡ニ因テ増減ア
ルモノナリ絲量多キ其種類ヲ以テ云ヘハ赤質ノ類ニ如スト雖モ青質ノ經濟上ニ
利アルニ若カス

關口源七 絲量ノ多キヲ得ルハ温暖ヲ主トシテ掃立ヨリ柔カナル桑ヲ以テ充分ニ
養ヒ三眠ヨリ砂土交リナル高燥ノ場所ニシテ植付ヨリ七八年ノ桑ニテ蠶裏ノ溜
ラヌ様注意シ養ヒ上簇ノ中温氣ニシテ風氣流通ヨキ様ナスルハ糸量必多カルベ
カラス

木村九藏 成繭ニ絲量ノ多少アルハ固ヨリ飼養ニアルモノナリ蓋シ温暖法ト清温

法ノ二育法ニヨルキハ蠶兒健康ニシテ食桑消化宜キヲ得日數三十日乃至三十五日間ニシテ熟蠶トナルモノナレハ絲量ニ於ケルモ勢ヒ亦多カラサルヲ得ス然レ其飼養中氣候ノ適度ヲ失シ或ハ燥或ハ濕或雨濕ニ侵サレ桑冷ヲ來ス等皆目取ニ害ヲ及ヌモノナリ

徳江八郎 同種同桑ヲ以テ絲量多キ繭ヲ得ント欲セハ兒蠶ヲ養フニ寒暖計七十度ヲ下ラス四眠起八十度ヲ越サル様注意シ厚地ノ桑ニシテ根ニ勢力アルモノヲ切採リ貯ヘチキ葉ノ幾分力弱リタルヲ以テ充分養フニ若カス

第拾五條 解舒ノ難易ノ事

松井庄作 此解舒ノ難易ハ種々ナル原因ヨリ生スルモノニシテ桑葉ニモ飼養ニモ因レリ然レ共最モ大關係ヲ有スル者ハ空氣ノ流通ト蒸燥乾殺トニアリ故ニ可成空氣ノ流通ヲ善クシ簇ニ入ル、中モ能々此點ニ注意スルヲ以テ肝要ナリトス而シテ繭ニナリテハ蒸殺燥殺ノ二者相待テ行フヲ宜シトス若シ大陽ニテ乾スルハ繭ノゴム質乃チヤノノ如キモノ大物ノ熱ニヨリテ蒸殺シ解舒モ難ク光澤ヲモ

失フニ至ル故ニ蒸燥殺ノ二者ヲ適宜ニ施スヲ可トス但信州甲州邊ノ繭ハ解舒シ易ク奥州ハ解舒シ難シト是ハ其土地ノ氣候ニモ因ルヘケレ共飼育ニモ因レリ奥州ニテハ温暖一法ニテ飼ヒ信甲ハ温暖ト清涼トノ中間ヲ折衷シテ施ス故至極解舒シ易キナルベシ

宮下六三郎 空氣ノ流通ヲ肝要ナリトスルハ實ニ尤也或ハ土地ニ依リ興弊アリテ目方ガ減ルト云フテ却テ立テ籠メル者アリ甚タ忌ムヘキ事ナリ又桑葉ニ燒酎ヲ用ユル者ナレ共此ノ桑ヲ與フルハ解舒シ難クナル也

矢島常七 簇ニ至テ寒氣ヲ受クル中ハ繭縮ミテタケ不宜温暖法ニ依ルキハ其患ナシ故ニ寒暖計八十二三度ノ溫度ニテ簇ヲ乾シ繭ヲ作ラセルヲ最モ肝要ナリトス渡邊明義 伊達郡上保原村渡邊源兵衛ト云フ者アリ解舒ノコニ付三ヶ年驗シタルコアリ同村ハ土地頗ル粗惡ナリ而シテ大隈川筋ノ砂地ニテ桑ヲ培ヒ居レリ然ルニ今度山形ト福島トノ間ヲ開キタル中ノ新道乃世大路ト云フアリ上保原ヨリ六里程モアリテ深山ナリ則チ同人ハ二三年前ヨリ其土地ノ桑ヲ買テ飼養シ地桑ト比較スルニ繭ノ光澤モアリ糸量モアリテ極テ解舒シ易キトノコナリ之ニ由テ考

フルニ解舒ノ難易ハ大ニ地味及肥料ニ關係スル者ト思惟ス
佐藤傳平 生ハ若松ナリ其近邊ニ猪苗代ト云フ所アリテ此所ニテハ引蠶巢坐一枚
ニ付十頭程見ユルト上ル例ナリ然ルニ其爾ハ甚タ解舒シ難シ依テ若上ケテスレ
ハ解舒シ難キ者ト考フ

野村吾八郎 茶種穀ニテ簇ヲ拵ヘタル者アリシカ解舒甚タ難澁ナリシ依テ豆穀菽
ヲヨントス注意スレハ木ノ枝ニテ上ルモ害ナシ唯若上スルハ惡キ様ナリ

田島定邦 若上ケノ弊ハ各地共誠ニ除キ難キコトナカラ動物ニハ部ア事ヲナスノ時
節ト云フ者アリ然ルニ其若キ中乃チ未ダ練熟セサル者ニ事業ヲナサシメトス

ルハ甚タ無理ト云ハサルヲ得ス故ニ若上スル中ハ糸量ヲ減スルハ勿論爲メニ莫
大ノ害ヲ來スヘキハ當然ナリ何卒若上ノ弊ヲ除キタキ者ナリ

野村藤太 如何ナル者ヲ簇ニ用ヰルモ到底濕氣アル以上ハ必ス解舒シ難キ者ナリ
故ニ乾クヲ專要トセサル可カラス彼ノ若蠶ヲ舉ルヲ欲セサル者ハ他ナシ只若蠶

ナレハ小便等ヲナスコト多キヲ以テ爲メニ濕氣ヲ増ス恐レアルヲ以テ也
桑島餘太郎 解舒難勿ハ糸ノ増減ニ關スルモノナレハ糸ニ製スヘキ繭ハ尤モ注意

スベキナリ其注意ハ籠簀ノ時ヲ第一トシ貯方殺虫之次ク籠簀ノ時ハ暗室トナレ
テ空氣鬱閉セサルヲ良トス殺虫ハ始メ強火力(余リ強キハ蠶ヲ破テ繭ヲ損スルコト有)第二ヲ少シ弱クシ
次第ニ弱クシテ第三次位ニ及ベハ大低宜シキモノナリ第一ヲ蛆殺ト云ヘ第二ヲ
以テ蛾止メト云ヒ第三ヲ乾カント云フ天氣ノ都合ニ依テ尙火ヲ用ヒテ第四ニ及
フモ可ナリ蒸殺ト天火殺トハ餘リ善ナルニアラス貯方ハムレサル様カビザル様
ニシ秋風ノ頃ヨリ袋ノ類ニ仕舞ナハ可ナリ若シ過テ解舒ノ難ナルアラフハ夜露ヲ
掛クルカ亦ハマルセトルサボンヲ用ユルモ可ナリトス如斯ハ過テナキノ無害ナ
ルモノナリ

關口源七 熟蠶ニ至ル迄裏被ヲ注意シ簇ニ揚ケ濕氣ナキ様乾カスルハ解舒果シテ
易シ

木村九藏 夫熟蠶ヲ簇中ニ散スルニ殊ニ懼ルヘキハ風冷濕且不潔物ヨリ臭氣蒸發
シテ熟蠶ノ巢ヲ掛ルヲ侵ス事是ナリ若如斯クアルハ爲ニ成繭ノ光澤ヲ失フ其
上甚シキハ見ル可ラサルノ薄皮ニシテ止ム余積年簇ヲ製スルニ意ヲ用ヰ幾分發
明スル所無キニアラス往年以來南甘樂郡山中ニ往返シテ其養蠶ヲ爲ス者ヲ見ル

ニ簇中ニ莖ヲ用ヰスシテ繼紙ヲ用ユ其成繭ノ解舒ニ於ケル容易ニシテ商人ノ出
入スル者亦之ヲ喜フ蓋シ此法濕氣ヲ避クルニ好キノミナラス蠶溺ノ蒸發莖ニ比
スル又清潔ヲ覺ユ然レ共蒸ニ用ユル多ク櫓之枝ニシテ余等カ用ユル枝竹ニハ劣
レリ上簇中種々氣候ノ感觸ヲ懼ルカ故ニ余ハ枝竹ヲ第一トシ柴木之ニ亞キ菓
又其次ナリトス凡解舒ノ難易ハ上簇ノ用意如何ニ因ル其滯難ヲ覺ユル者ハ其用
意ニ反スルニ外ナラス且切斷ヲ來ス如キハ概チ風冷濕ノ障觸ニヨリ簇中ノ熟蠶
躊躇スルニ由テ生セサルナシ

德江八郎 解舒ノ難易ハ上簇ノ乾濕ニ因ル故ニ之ニ用ユル所ノ品ハ雨天ニ際スル
モ濕氣ヲ帶ビサル品ヲ用ヒ且籠蓋三日目ニ至ラハ特ニ空氣ノ流通ヲヨクシ乾燥
ナラシムヘシ然ルモハ解舒難キナシ

第十六條 生皮苧多少ノ

野原吾八郎 タナノ懸シキヨリ生皮苧ヲ多ク生スルモノトノミ考ヘ居ソリ飼養如
何ニ至テハ未タ經驗セズ

佐藤傳平 タナノ懸シキヨリ生スル者ヲ全クシ生皮苧ノ區別ハ何ニ因テ知ルヲ
得ヘキ哉 滋口ノ藤太ハ第一原種ニシテ第二原種ニシテ第三原種ニシテ第四原種ニシテ
德江八郎 説明生繭ヲゴシテ見ルガハ分明ナリ解舒ハ何程ヨキモ外面ニ余分チ
本ル者附着シテ居ルヲ言フナリ以テ養蠶ノ注意不出意ニシテ養蠶ノ注意ニ出
松井庄作 生皮苧ヲ生スルハ飼養ニモ因ル可レ共第一原種ニ在リ原種中鬼縮ト云
フ者ノ如キハ何程能ク飼養シテ養蠶トシ生皮苧ヲキ能ハス故ニ原種ヲ撰フナリテ
肝要ナリト思考ス而シテ原種ハ赤引小石丸ヲ可トス

河瀬秀治君 臨席セラルルニ藤太ノ言ハク第一原種ニシテ第二原種ニシテ第三原種ニシテ第四原種ニシテ
矢島常七 生皮苧ノ多キハ飼養ニマリ第一蠶ウヌハ乾ク様注意シ最モ庭起ニハ濡
桑ヲ與ヘサル様ニシルヲ以テ良トス
德江八郎 生皮苧ノ多少ハ種類ニマレモ又同種ニシテ飼養中ノ乾濕及ヒ蠶裏ノ拔
方充不充ニ依テ繭一斗ニ付五匁乃至十匁ノ多少ナリ故ニ此少量ヲラシメテ欲セ
ハ火力ヲ用ヒ清温ヲ主トシ且與桑ノ過キテ濕氣ヲ來サマル様數回薄ク與ヒ四眠
起蠶糞ニ臭氣ヲ帶ビサル様裏ヲ拔キ庭ヲ換ルニ注意スベキナリ

○ 野村藤太 僅キ一十年ノ經驗ナレ共参考ノ爲メ一言セシ生ハ本年西群馬郡青梨子
村井草太郎右工門氏ノ種ヲ乞フテ之ニ市兵工桑ト甲州桑トヲ與ヘ別々ニ千頭ツ
ハヲ飼養セリ然ルニ其取獲ハ同量ナレ成繭ニ至テハ大ニ異ナレリ市兵工桑ヲ
與ヘタル方ハゴツツキ甲州桑ヲ以テ養ヒタル方ハ滑繭ヲ得タリ四百回ニ掛ケン
ニ市兵工桑ノ方ハ繭口太ク解舒シ易ク甲州桑ノ分ハ繭口細クシテ回数多シ依テ
考フルニ繭口ノ細太ハ桑ニモ餘程關係ス成ナレバトノ感覺ヲ惹起シタリ
關口源七 繭口ノ細太ハ原種ノ種類ニ關係ス成テ少ナカラスト雖モ肥料ノ十分届
キタル桑ヲ以テ養ヒタル繭口亦太キを得テ一類ニテニテ中取
木村丸藏 繭口ノ細太ヲ來ヌ所以ハ養桑ノ注意不注意ニヨル故ニ養桑ノ貯藏ニ注
意シ且濡桑等ヲ與フルコトヲナク蠶ハ健康ヲラシムルハ繭口ノ太キを得ルハ
徳江八郎 繭口ノ細太ハ第一種類ニアリ第二飼養法ニアリ故ニ同種ニシテ太カラ
シメシトモハ兒蠶ノ期清温育モシテ強壯ニ養ヒ且薄飼ニシテ蠶體ヲ肥太カラシ

ムルニ若カス

第十八條 繭貯方之事

野原吾八郎 生等ハ八斗位ヲ一度ニ蒸ス器械ヲ用ヒ蒸殺シテ籠ニ單批シ時々轉覆
ス而シテ立秋後之ヲ囊中ニ納ム
角田萬作 昨年試ミニ瓶ノ中へ詰メ其瓶ヲ熱湯中へ入レ瓶中ノ空氣ヲ抜き去リ直
チニ密閉シテ仕舞置キシカ三十日間モ經テ終ニカゼヲ生シテ失敗シタリ
原齋次 蒸殺シテ貯フルヲ可トスレ共蒸殺シタル以上ハ一二時間風ニ當テ乾シテ
然ル後其内ヨリ死籠リノミ拾ヒ取り直ニ絲ヲ製スレハ他ニ害ヲ及サルハ也然リ
ト雖モ其殘リヲ其儘棚へ上ケ置ケルハ必ス焙或ハ虫ヲ生スルモノ也故ニ燥殺ヲ可
トス併シ蒸殺シテ貯フルニハ其後百六七十度ノ熱度ヲ以テ燥殺シ四時間程モ置
キ夫ヨリ一日ニ二度位ツ、手入ヲナス如クスルコト二十日間半ニシテ秋ノ彼
岸ニ至リ囊中へ入レテ貯フルナリ糸ノ光澤ノ能キモ解舒シ難易モ皆繭ノ手置如
何ニアル者ト信ス

午後三時二十五分休憩

關口源七 上簇ノ日ヨリ九日或ハ十日目ニ至リ簇ヨリ抜き取り燥殺シ籠ニノモナ
キ二日或ハ三日目位ニカキ廻ハシ亦右燥殺ノ日ヨリ十二三日間ヲ經テ燥殺シ紙
ヲ覆ヒ時々手入ヲナシ貯フヲ良トス

木村九藏 繭ヲ貯ハカビヲ生セサルヲ專一トス故ニ燥殺法ニテ先ツ火ノ上ニ蠶ヲ
焚キ火ノ薄ク見ヘルヲ度トシ其上ニ鉄丸ヲ掛テ口ヨリ蒸氣ヲ求メ蒸氣力三分火
力七分トス而シテ敷ニ紙ヲ張リタル器ニ繭ヲ一粒並ヘニシ温度百四十度ヲ以テ
ス尤モ其時間ハ繭肉ノ厚薄ニ因長短アリ而シテ殺繭シタルモノハ取出シテ後凡
二十分時乾シ器ニ移シ空氣流通宜シキ場所ニナキ日々手袋ヲ用ヒテ手入ヲナス
扱テ二度殺ハ四五日間經タル後更ニ前ノ如クシ土用迄怠ラス手入ヲナシ保存ス
德江八郎 繭貯方ハ蠶ノ蛹ト化シタルヲ期トシ「蠶ノ蛹ト化スルハ四眠起ヨリ熟
蠶ニ至リシ日數ト同シ」火氣百三十度ヲ以テ三時間燥殺シ簾ニ散布シ之ヲ隔日
攪攪シ以後雨天二日以上續クコアラハ百二十度ノ火氣ヲ以テ乾燥ス急火ヲ以テ
乾燥スルハ害アルナリ

會長速水堅曹 此ヨリ追加問題ノ逐條議ヲ開クベシ

追加第一條 細蠶ノ原因ハ如何

矢島當七 細蠶トナルノ原因ハ蠶種ニモ因リ共先ツ掃立ノ青ミカトリテヨリ日
數ヲ經テ發生スル蠶兒ニ多クハ此病アル様ナリ故ニ此ニ注意シテ豫防セハ必ス
之ヲ防キ得ラルベシ

德江八郎 細蠶タルヤ多クハ三眠ノ際生ス之ヲ諺ニ休マスト云フ此ハ未熟蠶ヲ上
簇セシメ其成繭ヨリ出タル蛾ノ産ミタル種ヲシテ發蠶ノ後養方不注意アリ亦ハ
冷濕風ノ害ヲ受ケタルモノ必ス此病蠶トナルナリ且未熟ノ蠶ニアラサルモ巢撰
ミ種トシテ繭ノ形ヲ及緊緩光澤ニ至ル迄撰ミタル良繭ヨリ取りタル種ハ則チ良
種ナリト云ト雖此種ヲ以テ飼養セハ良蠶ナルモ幾分ノ細蠶生スルモノナリ其
理由ハ巢ヲ撰マント欲スルヲ撰繭法ニ詳シカラサルニ由ル格好其他總テ満足ノ
結繭ヲナタモンハ未熟ニアラサルモ未ダ十分ノ蛻蠶ニアラザレハナリ

追加第二條 流蠶ノ原因ハ如何

高井梅吉 流蠶ヲ生スル原因ハ桑園ノ地質ニ關係スル少サカラス。雖モ居室又ハ
林ニ接近シテ空氣流通ノ惡シキ場所之桑ヲ與フニ因ル
鳥田清作 腐敗病則流蠶ハ血液ノ分色宜シキヲ得サルヨリ臍尿管中ニ結晶物ヲ充
實シ終ニ之ヲ閉塞スルナリ且腸中ニハ(ビユクオチ)ニナルモノヲ醸シ而シテ是
カ腐敗ヲ促シ全身次第ニ柔軟ニシテ簇ニ登ルト雖モ斃レサルヲ得ク斃レテ後ナ
身色變シテ黒色トナル

德江八郎 流蠶ト稱スルモノハ熟蠶ニ至ル迄無病ニシテ上簇ノ后腐敗スルモノナ
リ此原因ニ因シム久シ然ルニ未タ確乎タル原因ヲ知ル能ハサレモ森林及家屋ニ
接近シタル處ノ桑ヲ以テ養ヒシモノ上簇ノ后鬱熱冷濕ニ遇ヒハ之ニ至ルコト多シ
此以考レハ森林家屋ニ接近スル處ノ桑ハ空氣ノ流通宜シカラスシテ幾分ノ窒素
ヲ増シ加ルニ人家ニ接近ノ場所ハ自然鹽酸氣強キノ理アリテ害トナリ遂ニ此病
原トナルモノト考フ
木村九藏 德江君ノ說ニ同意ナリ

追加第三條 蠶室ノ適否

松井庄作 各地方ニヨリテ異ル者ナレハ一概ニ論スルヲ能ハス。雖モ參考ノ爲メ
聊カ卑見ヲ述ヘシ動物ノ内ニテモ蠶ハ陽ノ物ナル故力メテ空氣ノ流通ニ注意シ
成ヘク乾燥ナル地ヲ撰フヘシ而シテ一室内ニテモ上棚ニハ節蠶流蠶等多ク生シ
下棚ニハ後レ蠶ヲ生シ中棚ハ無事ナリ斯ク三等ニ分ル、原因ハ要スルニ室内ノ
空氣暖氣ノ爲メニ蒸發スルヨリ下ヨリ新鮮ノ空氣交代スルヲ以テ下棚ハ直接ニ
其新鮮ノ氣ニ觸ル、故後レ蠶等ヲ生スルナリ渾テ動物ハ余リ直接ニ新鮮ノ氣ヲ
受クルハ不利ナレハ也中棚ハ空氣中和ヲ得ルヲ以テ無事ナリ上棚ハ空氣腐敗ノ
委アリ何ントナレハ中下二棚ヨリ吐ク所ノ空氣窒素及ヒ青物ノ濕氣等皆上棚ヘ
蒸登スレハナリ故ニ能ク此邊ニ注意シ努メテ上ノ方ノ氣ヲ抜クヲ專要トス現ニ
蠶室ノ空氣抜ノ口ニ面スレハ堪ヘカヌキ程ノ惡臭ヲ覺ユルナリ吳々モ空氣ノ流
通ヲ計ルヘシ
野村藤太 土地ニ因リテ其注意モ亦異ナレリ乾燥ノ地ナレハ火力ヲ用ヒサルモ自

然空氣モ乾キテアル故窓戸等ヲ開ヒテ空氣ヲ交代セシムルモ可ナシ共之ニ反シテ濕地又ハ草木多キ地ハ空氣濕フテアル故四方ヲ閉鎖シ成ヘク室内ニ濕氣ヲ入レサルヲ要ス斯カル所ハ勿論火力ニ賴ラサル可カラズ火力ヲ用井ントスルニハ棟ヘヤグラ或ハ氣管ヲ設ケ空氣ヲ抜ク丁肝要ナリ

追加第四條 繭ムクレタナノ原因如何

宮下六三郎 ヤトロ小屋へ入レタル后寒暖ニ烈シキ差違アルルハ晝夜ヲ分タヌ寒暖ノ平均ニ注意スヘシ然スレハムクレタナノ生スル患ナシ何トナレハ寒暖何レモ其度ヲ越ユレハ蠶シハラク休ムカ爲ナリ

追加第五條 病桑樹ノ原因及治方如何

宮下六三郎 十一月頃前後ニ桑ニ白キボツ、ノ出來ルコトアリ之レハ何程工夫スルモ醫スル能ハス故ニ若シ此病ニ罹リタルルハ速ニ桑樹ヲ根ヨリ伐リ取リテ他ヘ傳染セヌ様ニ注意スルヲ緊要ナリトス

高井梅吉 桑植付ノ節根へ石灰ヲ播テ植付レハ病害ヲ生スルコトナシト考フ

野原吾八郎 病桑ニ付諸君ノ經驗ヲ問ハント欲スルコトアリ生ノ居村近傍乃チ武州秩父郡邊ニテハ縮レ枯レト云フ一種ノ桑病流行セリ最初桑ヲ植付テヨリ三四年目ニ至リ切り取りタル跡へ僅ニ梢ヲ生スレハ忽チ縮レ枯レトナルナリ郡中此害ヲ受クルモノ實ニ幾多ナルヲ知ルヘカラス此治方ヲ知ル人アラハ幸ヒニ教示セラレヨ

矢島常七 我地方ニモ白キボツ、ノ生スルコトアリ方言桑シラミト云フ是レハ精々手ヲ入レ繩ヤ竹ノ蔑等ニテ掃除シ之ヲユキ採リテ十分ニ肥料ヲ與レハ敢テ切り取ルニ及ハス又縮レ枯レハ地深ノ濕氣多キ地乃チ本縣下利根郡邊ニ生スル病ナリ濕氣多キ地ニハ蚯蚓多シ此カ桑根ニ害ヲ生スルナリ故ニ之ヲ除クハ石灰等ヲ以テセハ可ナラン

田島定邦 我島村地方ニモ本年ハ縮レ枯レ多分ニアリテ種々困苦シテ此害ヲ除カシヨク試ムレモ更ニ効ヲ奏スル事ナシ故ニ目下ノ處ニテハ病桑ヲ抜キ去リテ新ニ桑ヲ植付テルヨリ外ニ策ナキ有様ニ立至レリ實ニ見ルニ忍ビサル程ノ状態ナ

リ諸君幸ニ良法アラハ示サレヨ
角田萬作 桑ヲ植付タル者數十日間ハ十分ニ繁茂シ夫ヨリ忽チ枯ル者アリ仍テ直ニ之ヲ掘取リテ驗スルニ根ノ割レタル者及ヒ傷キタルモノ等チ其儘植付ケタルヨリ生シタル者ノ如クナリ果シテ然ラハ植付ノ時分苗桑ヲ能ク調フレハ此害ヲ除クヲ得ヘント思考ス

桑島新平 小生モ縮シ桑ニハ甚タ困難セリ依テ種々手ヲ盡シテ試ムルモ更ニ効チキニヨリ此上ハ拔去ルマヲト思ヒ其儘暫ク打捨オキシ中駒場農學校ノ船津傳治平氏ニ會シ親シク之ヲ質問セシニ此チ、レ桑ハ桑根ニ一種ノ病ヲ發シタル者ニシテタトヘ一旦伐取ルモ又新芽ニ病チ及ス者ナレハ到底之ヲ治スルノ法ナシ故ニ一タビ此害ニ罹ラハ斷然掘取リテ捨ツルニ如カスト云ハレタリキ又同氏ノ説ニ依レハ桑虱ハ空氣ノ流通セサル日陰ナドニ多ク生スル者也之ヲ治スルノ法ハ石灰ニ鹽ヲ加ヘ之ヲ糞タラシニテ桑虱ニ擦スレハ忽チ其功ヲ奏スヘント

追加第六條 炎暑凌キ方ノ

宮下六三郎 炎暑ヲ凌クニハ桑ニ少シ水ヲ掛テ平素ヨリ幾度カ余分ニ極薄桑ニ與フレハ凌キノ付ク者ナリ戸ヲ明ケ開キテハ桑葉モ凋ミ却テ害ニナルヘシト考フ小泉信太郎 屋根ノ上ニ古藁ヲ敷キ蠶室ノ四方ヲ明ケテ風ヲ入レ桑ヲ薄クシテ幾回ニモ與フルヲ可トス

佐藤傳平 我地方ハ渾テ温暖飼ナルヲ以テ悉ク西日ヲ恐ル、也故ニ蠶室モ此ニ注意シテ構造セリ而シテ何程日除ヲナスモ桑ヲ薄クシテ幾度モ與ヘサレハ到底凌キ難キ者ナリ若又薄桑ニシテ尚暑ニ堪ヘカダキキハ手桶ノ如キ者ヘ水ヲ入レ一室内ヘ四五箇位持込メハ其水蒸氣ニテ室内ヲ冷シ寒暖計二三度ハ下ル者也
角田萬作 或人ハ糲糠ヲ水ニ浸シ一籠ニ五六升ツ、フリ掛ケ暑ヲ凌キシコアリト聞ケリ

第七條 絲ノ質類ハ何ニ因リテ生スルカ

高井梅吉 絲ノ質類ハ飼養ノ届カサルト原種ノ粗惡ナルトニ依ルモノナルヘシ野原吾八郎 簇ニ上ケタル後度々手ヲ附ケレハ此類ヲ生スルト云フコト聞ケリ

松井庄作 飼養ニモ關係スルナルヘケレ共第一ハ原種ニアルナリ六十七倍ノ顯微鏡ヲ以テ原種ヲ驗スルニ赤引小石丸等ニハ其兆候少シ

桑島新平 質類ヲ除カントスルハ余程困難ナルモノナリ信州佐久郡邊或ハ沼田邊ノ繭ニモ大分質類アリタリキ當時小生ノ考ニテハ地味ニヨリテ斯クアルモノト認定セシカ尙能ク經驗スルニ襪ヲ簇ニ入レ繭ヲ作ル中ニ虫ノ折々休ミシトアリ其時少シ絲ヲクリ休ミテ又絲ヲ操リ始ムルノ際ニ口元ニ溜メタル絲口ニ大ナル類ヲ生セリ此ハ小生カ或日蠶ノ繭形ヲ始メタルヲナガメナリシキ不計顯レタリ因テ尙驗スルニ前ノ如ク想フニ蠶ノ少シク弱キト或ハ外ヨリ觸ル、故障トニ因テ生スルナラン然ル輪類ニ至テハ未タ詳ナラスト雖モ種類ニ依リテナリト思考ス先ツ其一ニヲ擧ケテ言ハ、奥州地方ニテ種繭ヲ撰ルニ第一ニ縮ヲノ全フシタルモノヲ撰ヒ以テ元種トナス由則テ質類ヲ恐ル、ナリ因テ其縮ヲノ全フシタルモノヲ撰返シ試驗スルニ質類甚タ少シ第二ニ支那種ノ繭ヲ製絲セシニ眞ニ美ヲ尽セリ己ニ今般參考ノタメ共進會ヘ其絲ヲ備ヒタルガ類更ニナク絲口細目ニシテ光澤無雙ナリ依之第一ニ種類ヲ撰第二ニ蠶兒ヲ壯健ヲヲシメハ質類ノ患ナシト云モ敢テ過ナカカルヘシ

ト云モ敢テ過ナカカルヘシ

第八條 温暖育ト清凉育ト難易及利害得失如何

松井庄作 本題ハ養蠶家ニハ一大關係アル貴重ノ問題ナリ抑温暖育ハ最モ注意ヲ要スル者ニテ僅カニ十分廿分間ニ總体ノ蠶ニ大害ヲ來ス者ナレハ練熟セサル養蠶家ニハ容易ニ實行シ難キ者ナリ冷育ハ之ニ反ス故ニ育法ノ難易ヲ云フキハ温暖ヲ以テ難トス而シテ其利害得失ニ至テハ原絲製造家ト製絲家トノ二點ヨリ論セサル可ラス則テ原種製造ノ點ヨリ云フキハ清凉育ヲ以テ適セリト云ハサルヲ得ス如何トナレハ温暖育ノ蠶兒ハ幾分カ弱シ故ニ上田地方ノ經驗ニヨルキハ成丈大ナル草屋根ノ家ニテ中和ノ氣候ヲ取り四十日位ヲ度トシ飼養シテ原種ヲ製造スル也而シテ暖育ト表面美麗ナル種ヲ得レ共之ヲ諸國ヘ出シ其飼養難勿チ聞ケハ困難ナルヲ告ク然ルニ四十日位ニテ冷育ニセシ種ハ表面ハ見惡キ者ナレ共成繭ニ至リテ大ニ宜シ是レ之ヲカアル種ト云フ近來奥州地方ヨリ赤引ノ種ヲ取リ寄セテ試育スルニ其養法甚困難ニシテ中等以下ノ養蠶家ニハ容易ニ飼養シ難

シ又製絲ノ點ヨリ論スルキハ温暖育ヲ以テ成ヘク日數少クシテ上ル様ニスル方
計算上ニ於テモ必ス利アルヘシ故ニ養蠶ノ難易ヲ論スレハ冷育ヲ以テ易シトス
得失ヨリ論スルキハ温暖育ヲ以テ勝レリトス

田島定邦 松井君ノ云ハレシ通實ニ本間ハ養蠶家緊要ノ問題タリ依テ聊意見ヲ述
ヘン諸君ハ清涼々々ト云ヘト只暖熟ノ語ニ對シテ清涼ノ文字ヲ當テタルナルヘ
ケレ共單ニ清涼ト云ヘハ故ラニ清涼ニセサル可ラサル者ノ、如ク聞ヘ爲メニ大
ニ弊害ヲ生スヘシ故ニ小生ノ考ニテハ空氣流通養法トカ或ハ空氣自由ノ養法ト
カ云フ文字ニ改メラレナハ穩當ナルヘシト思維ス併シ姑ク清涼ノ文字ヲ假用シ
來テ此ニ養法中何レヲ是トシ何レヲ非トスルノ二途ニ就テハ頗ル困難事件ニシ
テ容易ニ一定シ難シ且松井君ノ云ハル、通リ蠶種家ト製絲家トニ因テ大ニ其思
想ヲ異ニスル者ナリ然レ共今一般養蠶家ノ上ニ付テ之ヲ云フキハ清涼法ハ戸々
人々皆養ヒ得ヘキモ温暖ニ至テハ否ラス決シテ皆能クシ得ヘキ者ニアラサル也
故ニ温暖法ハ上等養蠶家ノ育法トモ云ヘキ者ナリ然リト雖モ本邦今日ノ有様ニ
就テ觀察ヲ下セハ最モ成シ易クシテ十戸ハ十戸皆全然豐作ヲ得ヘキ處ノ清涼養

法ニ若ク者ヲカルヘシ小生曾テ札幌ニテ養蠶セシコアリシカ官立ノ大厦ヲ蠶室
トシ又樹木ノ深キ處ニテ養ヒタリ又官ノ命ニヨリ支那蠶ヲ八十七八度乃至九十
度位ノ温暖ニテ十八日間ニ飼上ケタリ又等シク清涼育モ行ヒタレ共何レモ仕上
ニ至テハ好結果ヲ得タリ故ニ養法ニ少ク熟練シタル者ナレハタトヘ如何ナル方
法ヲ以テ飼養スルモ決シテ失敗ナカルヘシ然レ共人々戸々普及シテ能レ得ヘキ
ハ清涼ニ若ク者ヲシト信認スル也

野村藤太 温暖清涼ノ二養法ニ就テハ種々議論アリモ到底飼養法ニ熟練スル以上
ハ何レモ害ナシト信スレモ清涼家乃チ自然養法ヲ以テ適當ナリトスル論者ニ向
テ一言スヘキコアリ固ヨリ養蠶ハ活計ノ爲メニナス者ナレハ何ソ飼養ノ難易ヲ
問フノ理アル可ケンヤ自然法ノ説ハ元來蠶兒ハ天然生ノ動物ナレハ亦天然ノ氣
候ニ隨テ飼養スヘキハ當然ナリトシ主旨ナレモ生等ハ此自然ニ任スノ一點ニ於
テ却テ弊害ノ生センコトヲ恐ル、者ナリ何トナレハ凡ソ天地間之萬物一トシテ變
遷セサル者ハアラサルヘシ就中動物ノ如キハ進化變遷ノ最モ著キ者ナリ故ニ蠶
兒ノ如キモ山野ニ在テ自然ニ成長セシキト人ノ飼養ニ依テ成長スル今日トハ變

遷進化シテ以テ大ニ其性質ヲ異ニセシハ更ニ疑ヲ容ル可ラサル處ナリ果シテ然
ヲハ其飼養法ニ至テモ亦單ニ自然ニノミ任セスシテ專ラ人造工風ノ養法ニ依ラ
サル可ラサルハ論ヲ待タサル也

佐藤傳平 小生ハ清涼ノコトハ少シモ知ラス温暖育ハ廿七八日位ニテ上ルモアレト
先ツ三十五日ヲ適度トシ四眠迄ハ寒暖計七十五度四眠後ハ七十三度位ナラント
ヲ要ス然レモ火力ヲ假テ以テ陽氣ヲ作り養フコトナレハ注意最モ怠ルコト勿レ十分
ニ晝夜共注意届カハ決シテ害ヲ受クル患ナシ而シテ掛田山戸田邊ハ原種一枚ニ
付正葉三百貫目ヲ與ヘ絲量一貫五百目ヲ得ルヲ以テ普通ノ收穫トス

桑島録太郎 温暖清冷両育其難易利害得失ハ無論温暖育ヲ易ク且ツ利アルモノト
ナス或ハ温暖育ヲ以テ適生育ト云モ可ナリ如何トナレハ其蠶兒ノ春暖ニ生スル
ヲ以テ見レハ其暖氣ノ候ニ適スルノ性質ノ如クナレハナリ然ルヲ朝夕或ハ降雨
ノ際冷氣ヲ覺ユル時ハ人身スラ尚等衣ヲ重ルニ非ラスヤ况ンヤ裸体ノ小虫ニ於
テ何ソ冷氣ノ豫防ナカラヌシテ可ナラシヤ故ニ吾人ハ之ヲ三分ノ天造物七分ハ
人造ノ如ク寒暑乾濕ヲ防クハ養蠶家ノ擔任中ニ在ルモノトス一休病氣多少ヲ一

見シテモ清冷育ニ多ク温暖育ニ少ナキカ如シ聞ク處ニ因レハ我群馬縣下清冷育
平均ノ收穫ハ凡ソ原紙一枚ニ付絲量二百六十匁位ナリト亦岩代地方ノ火力育平
均ハ凡一貫目以上ニ至レリト以テ收穫ノ多キ見ルヘキナリ案スルニ清冷育ハ扱
人ノ職務トスル處僅ニ給桑ノ一事ニ止マルカ如ナレハ恰モ八分ハ天造物ノ如ク
シテ遂ニ吾ニ非サルナリ年ナリト云ノ語ヲ發セシムルニ及フ之其飼養或ハ逆ト
云ハサル可ラス温暖育ハ之ニ反ス故異蠶者ノナキニ非ラスト雖モ清冷育ヨリ少
ナキ之ヲ眞ノ易キト云テ可ナリ收穫ノ多キニ依テ見レハ其利得モ亦知ルヘキナ
リ而シテ尚適虫育ニ一種ノ利アリ清冷育ト温暖トハ飼育ノ日數凡ソ十日ノ差ア
リ故ニ農家ノ一業ナル蠶業其利アルヲ知ト雖モ麥列種植ノ秋蠶兒ハ盛食シ首ヲ
上ケテ餓ヲ訟テアルアリ何ソ夫多端ナルヤ遂ニ其飼育ヲ縮少スルニ至ル徒ヲニ縮
少スルノミナラス全ク廢スモノアリ故ニ其際僅ニ十有余日ノ遲速ハ蠶業ノ盛衰
興廢ニ關スル大ナリ思ハサルヘケンヤ然ルニ或ハ云フ清冷育ハ空氣流通宜ケレ
ハ決シテ之ヲ非難スルノ理ナシ温暖育コソ新鮮ノ空氣ニ苦シムト理ニ似テ否ナ
ハ温暖火力育ハ其室内ノ空氣流通劇シカラサルノミニテ却テ空氣ノ循環ハ宜シ

キ理ナリ暖マリシ空氣ハ上ヘ登リテ新鮮ノ空氣窓戸ノ間一葉ノ紙ヲ徹シテ其室
内ニ入ルアリ又火力ノ強弱蠶坐ノ模様ヲ巡視スル都度戸障子ノ開閉スルアルニ
於テヌク尚新陳交退ス何ソ敢テ新鮮ノ空氣ニ苦ムト云フノ理ナシ却テ四隅ニ滯
ラントスル空氣迄火力ノタメ循環ヌルカ如シ亦葉多量ヲ損スト否然ラヌ清冷
育ヨリ遷ノ初年ハ然ルニ似タレモ火力育ハ年々早ク切取ルヲ以テ幹ノ長スルト
桑木ノ年數ヲ保ツアレハ經濟上ニ利益アリヨシヤ格別ノ利ナキニモセヨ柔ナル
葉ヲ喰フテ成レルノ繭ハ厚クシテ柔カナリ故ニ製絲ニ宜トス

第九條 引蠶ノ老若利害如何

佐藤傳平 蠶糞一粒ノヨルヲ以テ滴度トス且追々上ケ残りタル分ハ引蠶ノ有無ニ
拘ハラヌ上ケテ仕舞フ也

野原吾八郎 蠶種製造スルニハ先ツ蠶糞ノ残りナキ處ト一粒残りタル處ヲ滴度ト
ス

宮下六三郎 若上ケテセシヨリ寧ロ老ヒタル方宜シカルベシ尤モ老ヒ過キルトマ

ワタヲ掛ルノ類モ往々アレモ之ハ強テ恐ルニ足ラヌ

桑島留治 蠶糞老若利害ハ其種類ト陽氣ノ都合トニ依ルヲ以テ一概ニ論スル能ハ
スト雖今近傍太ニ行ハル、赤質ハ度トスル蠶糞ノ二三粒残りル位ヲ可トス若
ナルハ老ナルヨリ害ノリトス其他ノ諸種類ハ絲繭見込ナレハ老ナルヨリ若ナル
ヲ良トス凡テ種繭ハ老ナルヨリ若ヲ良トス

第十條 露桑ヲ與フルハ如何

小泉信太郎 雨露ハ余程害ノアルモノナリ決シテ之ヲ與フヘカラス
宮下六三郎 露桑ハ一切用ナシ若シ己ムヲ得サル場合ニ於テ之ヲ用ユルハ清水
ニテ其雨露ヲ洗ヒ之ヲ立テ掛ケテ洗ヒタル水ノ乾キタル後之ヲ與フレハ敢
テ害ナシ

原齋次 養蠶家ハ必ス露桑ヲ忌ムナリ然レ雨天續キノキ己ムヲ得ス之ヲ用フルハ
ハ能ク露ヲ乾カシ蠶シタチ度々取換ヘテヤレハサシタル害ナシ

會長速水堅曹 先ツ是迄ニテ本會ノ問題ハ悉ク議了完結シタリ付テハ兼テ約束ノ
隨意演説ハ如何スヘキヤ 或ハ大日本蠶業會ノ發展ヲ論ずルニ當リテハ本會ノ
野村藤太 意見アル諸君ハ是非演説ヲランコトナセシテ仍テ意見アル諸君ハ舉手シテ
之ヲ表サレタシ
松井庄作 本會ノ初メニ當リテ會長ノ許可ヲ得テ提出シタル建議ニ付諸君ノ意見
ヲ問ハレタシ
會長速水堅曹 松井君ノ建議書ヲ今一回朗讀スヘキニ付諸君意見ヲ述ラレヨ
書記建議ヲ朗讀ス
古平原吾 小生モ建議者ノ一人ナルヲ以テ一言申述ヘシム生等カ遠ク數十里外ナ
ル信陽地方ヨリ此地ニ來リ會スルモノハ他ナシ只本會ノ主旨我々カ業務上ニ最
必要ナルモノト信シ大ニ賛成シタルヲ以テナリ然リ而シテ此必須有益ナル本會
ヲ只今回ニ止ムルハ實ニ生等ノ遺憾トスル所ナリ仍テ願クハ本會ヲ永遠ニ繼續
セシム年々一回位ツ、集談會ヲ開設シ而シテ又年三回乃至四會位雜誌ヲ發セン
コトヲ欲スルナリ其雜誌ハ蠶業上疑ハシキ件或ハ新ニ發明シタル事等アルハ渾

會長速水堅曹 先ツ是迄ニテ本會ノ問題ハ悉ク議了完結シタリ付テハ兼テ約束ノ
隨意演説ハ如何スヘキヤ 或ハ大日本蠶業會ノ發展ヲ論ずルニ當リテハ本會ノ
野村藤太 意見アル諸君ハ是非演説ヲランコトナセシテ仍テ意見アル諸君ハ舉手シテ
之ヲ表サレタシ
松井庄作 本會ノ初メニ當リテ會長ノ許可ヲ得テ提出シタル建議ニ付諸君ノ意見
ヲ問ハレタシ
會長速水堅曹 松井君ノ建議書ヲ今一回朗讀スヘキニ付諸君意見ヲ述ラレヨ
書記建議ヲ朗讀ス
古平原吾 小生モ建議者ノ一人ナルヲ以テ一言申述ヘシム生等カ遠ク數十里外ナ
ル信陽地方ヨリ此地ニ來リ會スルモノハ他ナシ只本會ノ主旨我々カ業務上ニ最
必要ナルモノト信シ大ニ賛成シタルヲ以テナリ然リ而シテ此必須有益ナル本會
ヲ只今回ニ止ムルハ實ニ生等ノ遺憾トスル所ナリ仍テ願クハ本會ヲ永遠ニ繼續
セシム年々一回位ツ、集談會ヲ開設シ而シテ又年三回乃至四會位雜誌ヲ發セン
コトヲ欲スルナリ其雜誌ハ蠶業上疑ハシキ件或ハ新ニ發明シタル事等アルハ渾

本會ニ通報シ雜誌ニ記載シテ以テ之ヲ會員ニ頒布スルノ主意ナリ諸君乞フ贊成アラシクナ
 松井庄作 建議ノ主旨ニ付一言セシ養蠶ノ國家ニ大關係アルコトハ今更喋々スルヲ要セス然リト雖此蠶業ニ因テ利益ヲ生スル所ノモノハ果シテ何ノ點ニアルヤト問ハシ旨トシテ精良品ヲ得ルニアリト答ヘサル可ク然リ而シテ其精良品ヲ得シト欲セハ宜シク各自實驗スル所ノ説ヲ互ニ交換シテ以テ業務上失敗ナキヲ謀ルヘシ小生茲ニ感スル所アリテ先年自ラ發起トナリ曾テ談會ヲ開キシカ僅ニ我報國社員ニ止マルノミ然ルニ今回此集談會ノ開設アルヲ聞クヤ生等ニアリテハ實ニ千歳ノ一遇トモ云フヘクシテ又得カタキノ好機ナリト欣喜雀躍自ラ禁スル能ハス數十里程モ遠キモ今此ニ來リ會シ幸ニ諸君ノ高説ヲ聞クヲ得タリ何ノ幸福カ施ニ加ヘン夫レ然リ而シテ斯ノ如キ有益ナル本會ヲシテ僅カニ此一回ニ已マシムルハ實ニ遺憾ニ堪ヘサルナリ依テ願クハ本會ヲ永遠ニ維持シ將來ノ幸福ヲ謀ラント欲ス其會則ノ如キハ大日本農會ノ規則ヲ標準トシ會費ハ年々六拾錢未滿トシ一ヶ年四回宛雜誌ヲ發兌シ之ヲ會員ニ頒布セントス且此建議ニシ

テ幸ニ多數ノ賛成ヲ得ハ一ヶ國二人以上ノ委員ヲ公撰シ万般ノ規則細目及方法ヲ議定セントス諸君幸ニ生等ノ微哀ヲ察シ續ク賛成セラシク切ニ希望ニ堪ヘサルナリ然リ而シテ生等カ斯ノ如ク僭越ノ罪ヲ犯シテ以テ發議スル所以ノモノハ何ソヤ他ナシ今日全國ノ養蠶家カ餘惡ナル蠶種ノ爲メニ夥シキ損害ヲ蒙ルモノアルハ職トシテ利己主義ナル蠶種商等カ所爲ニ之レ由ラサルハナシ而シテ其麓製亂造ノ弊害ヲ洗除スルニ至リテハ我上田地方專ラ其責ニ任セサルヲ得サルモノアレハナリ仍テ賦々ニ附スルニ忍ヒス聊カ卑見ヲ陳シテ再三諸君ノ高聽ヲ汚ス

星野耕作 松井君カ熱心努力以テ本會ヲ永遠ニ維持セントスル建議ノ主旨ハ生等能ク之ヲ了解セリ其厚意實ニ謝スルニ餘リアリ然リト雖モ今日蠶業者ノ一般ヲ觀察スルニ之ヲ實際ニ施行スルハ頗ル困難ニソ到底言フ可クシテ行フヘカヲサル如キ情態アルヲ如何セン好シ假令之ヲ永遠ニ實行スルモ其組織ノ困難ニ比シ之レニ勝ルノ實益ヲ得ルハ甚タ難キコナルヘシ故ニ先ツ本會ノ業ハ姑ラク之ヲ大日本農會ニ譲リ他日再ニ聯合共進會アルニ際シ必ス此集談會ヲ開クモノトセ

ハ敢テ不可ナカルヘシト信ス諸君以テ如何トナス

滿場柏手賛成ス

會長速水堅曹 只今星野君ノ説ニ滿場柏手シテ賛成ノ意ヲ表シタリ仍テ松井君ノ建議ハ成立セサルモノトス然リト雖モ松井君決シテ歎スルコト勿レ君カ熱心主張スル所ノ精神ハ實ニ滿場ニ貫徹シタリ故ニ他日必ス之ヲ實際ニ施行スルノ好機ヲ得ヘキハ期シテ待ツヘキヲ信スレハナリ

松井庄作 不幸ニシテ賛成ヲ得サルハ實ニ止ムヲ得サルノミ仍テ諸君ニ向テ尚一言スヘキコトアリ何レノ地方ヲ論セス他日斯クノ如キ集談會ヲ開設セラルハノ擧アラハ我報國社ヘモ通報セラレシコトヲ乞フ必ス參會シテ諸君ノ高論ヲ仰クヘン星野耕作 蠶藥癘絶ノ建議書ヲ提出ス

書記之ヲ朗讀ス

蠶ニ種々ノ病ヲ來スルコトアリテ爲メニ蠶業ト幾多ノ患害ヲ被ムルハ實ニ吾人ノ愁フル所ナリ然リト雖モ該虫タル元ト一個ノ無血虫タルニ過キサレハ之カ病源ヲ究メテ其治方ヲ施スハ能ク爲シ得ヘキ所ニアラス只力シテ之ヲ未萌ニ豫防ス

ルシ一策アルノミ然ルニ近來漫ニ養蠶方藥ト唱ヒ蠶病ヲ治シ得ヘキノ妙藥ナリト稱道シ以テ世上ニ發賣スル者アリ抑我群馬縣ノ如キハ蠶絲ノ業ヲ以テ大ニ江湖ニ信ヲ得タルノ地方ナレハ若シ一タヒ本縣ヨリ如斯方藥ヲ發賣ルトセハ或ハ恐ル無知ノ人民視テ以テ眞ニ蠶病ヲ治シ得ヘキモノト倣シ之ヲ實際ニ試用シテ曾テ其効驗ナキノミナラス却テ爲メニ依頼心ヲ懷キ其豫防ヲ怠ル大ニ患害ヲ來タサントナリ因テ茲ニ諸君ニ謀リ斷然該方藥ヲ發賣スルヲ禁セントス然リト雖モ我々ハ元來經驗ニ乏シ若シ蠶病ニシテ明カニ治シ得ヘキノ方法アラハ幸ニ教示セラレヨ果シテ之ナシトモハ我々ハ該方藥發賣ヲ禁止ヲ其筋ヘ乞ハントス請フ諸君意見ヲ吞ム勿カラシヨク

高橋信貞

星野耕作

田島定邦 建議ノ主旨大ニ之ヲ賛成ス實ニ蠶藥ヲ信スルヨリ來スノ害鮮少ニアラサルナリ依テ速ニ建議ヲナシ其細減ヲ謀ラントナ希望ス

滿場柏手賛成ス

田嶋定邦 清國養蠶書ノ抜粹ヲ朗讀ス

清國養蠶輯說中

鎮江養蠶方拔萃

東京 江頭六郎釋

鎮江地方ハ從前蠶事アリト雖其術未ダ精シカラス其養法ハ蠶老テ山棚ニ上ル
キ其棚下ニ必極熱シ火坑ヲ置キ蠶繭ヲ烘ル之ヲ烘ル所以ハ第一ニ蠶湯ノ水氣ヲ
燥カシ棚上ノ濕氣ヲ去リ乾燥ナラシムル爲メナリ第二ニハ蠶口ヨリ絲ヲ吐ク
甚タ速カニシテ且ツ其吐ク所ノ絲能燥キテ膠粘スレ共粘實セズ其絲ヲ以テ紬ヲ
織ルニ其光彩他處ノ紬ニ比スレハ格別綺麗ナリ他處ノ養法ハ之ニ反シ棚ニ上
ルキ全ク火炕ヲ用井ス之ヲ名ケテ冷蠶トナス其蠶ハ絲ヲ吐ク速カナラス膠粘
スレハ着實シ其絲ヲ繰ルニモ質純ナラスシテ且ツ切レ易シ火ヲ用井ルニ較ブレ
ハ旁々惡シ然レ共火ヲ用ヒタル蠶ノ熱ヲ病或ハ飢ヘタルモノハ留種ニスヘカラ
ス之ヲ養トモ良キ子ヲ生マス三度眠ノ蠶種ハ養セ易ケレ共絲少ナシ四度眠ノ種
ハ養難ケレ共絲多シ云々

左ノ一編ハ會員退散ノ後高橋信貞氏之演說ニ係ル

諸君ヨ拙者ハ今般ノ共進會ニ尋テ此蠶業集談會ノ設ケアルヲ以テ農商務卿ノ命
ニヨリ業務ニ老練ナル諸君ノ集談ヲ傍聽センカ爲メ此地ニ來レリ而シテ余モ又
本縣下ノ一民ニシテ當今職ヲ農商務省農務局ニ奉シテ貴重ナル蠶絲ノ業務ニ
辱フセリ今ヤ此會ノ畢ルニ往ニ發起者諸君ニ一言セントス諸君譬ク欠伸ヲ忍ヘ
抑モ本縣下ノ如キハ天賦固有ノ蠶國ニシテ古昔夙ニ其名アリ而シテ挽今信ヲ海
外ニ得名譽ヲ輝揮セシムルモノハ蓋偶然ニ非ラサルナリ當業諸君天賦ノ化育ヲ
賛ケ勉倦ヲサルノ致ストコロナリ國家ノ爲メ欣抃ニ耐ヘサルナリ然リ而シテ
本縣下蠶絲ノ現況ヲ通觀スルニ產繭ノ生絲額ニ於ル殆ント半數ナリキ而シテ明
治十三年ノ調査ニ係ル全國ノ產繭ハ二千三百八十四万九千七百九十斤余ナリ本
縣下十四郡產繭ノ總額三百七十五万九千九百九十九斤余ニシテ生絲ノ額ハ七十三万八千五
百五十斤餘ナリ由是觀之產繭ノ額ハ殆ント全國產額ノ八分一ヲ占メ生絲ノ額ハ
五分一ヲ占ムルモノ、如シ然ルキハ養蠶ノ業務ハ製絲ノ業務ヨリ劣レルヲ知ル
ヘシ依テ望ムヲクハ本立テ道生スト云フノ原理ニ基キ育蠶ノ改良増進ヲ第一着

トシ進テ製絲ト比シク全國產額ノ五分一ニ達スルヲ得ハ亦愉快ナラスヤ然ルキハ輸出物品中ノ第一位ナル蠶絲ハ三千有餘万同胸中ノ一小部分ナル上野人民ノ負擔ニ係レリ上野人民ノ義務モ又大ナラスヤ頃者或ル商沽ノ調査ニ係ル明治十三年ヨリ本年ニ至ル蠶絲ノ海外輸出ハ明治十三年ハ二万八千四百五十七個八分七釐ニシテ同十四年ハ三万八千七百〇五個七分九釐ナリ然ルキハ此兩年間ニシテ一万二百四十七個九分二釐ヲ増加セリ而シテ本年六月新絲ヨリ十月廿一日ニ至ル則前後五ヶ月間ニシテ横濱へ着荷セシ蠶絲海外へ輸出ニナルヘキ分二万五千六百五十八個ナリト然ルキハ爾後則來ル十六年五月滿日マテニハ凡ソ一万七千個内外ヲラント思料スト然ルキハ四万二三千個ノ數ニ達スヘシ業已ニ如斯年ハ一年ニ輸出ノ増進スルハ國家ノタメ太ダ賀スヘキノ至ナリ之ニハ種々ノ原因アルヘケレト生ノ考案ニハ博覽會及ヒ今般ノ共進會ノ如キ美學ヨリ蠶業上ニ名譽ノ貴重ナルヲ知り改良ノ實効ヲ第一トシ蠶種製造家ノ近年貿易市場ニ不利ヲ來セルニヨリ製種主義ヲ變シテ製絲主義ニ移ルモノ稍多キヲ第二トシ故ニ今一步ヲ進メ將來ニ望ム所ハ夫ノ清國ノ昔時地官ニ載スル若ク凡ソ庶民不蠶者ハ不

帛ト云ヘルノ原則ニヨリ奢風ヲ脱シ浮利ヲ轉シ愈以實利ニ力ヲ盡シ伊佛ニ凌駕シ本邦ノ眞面目ヲ海外ニ輝光セシメテ

各縣蠶業集談會目次畢
有志

